

原始貨幣と貨幣の起源

古 川 顕

要旨

貨幣の起源と、いわゆる原始貨幣の間には密接な関係があるが、「原始貨幣とは何か」を定義することは容易ではない。国や地域、時代により、あるいは論者によってさまざまな考え方があからである。原始貨幣について定義されないまま、多用されるケースも少なくない。本稿では、まず「原始貨幣とは何か」について検討したうえ、貨幣の起源と原始貨幣の関係についての代表的見解、すなわち福田徳三、モース、マリノフスキー、ポラニーの主張に焦点を当てる。福田徳三は、日本における経済学の創始者の一人と目されるけれども、貨幣の起源と宗教の関係を重視する彼のユニークな見解については、まったくと言ってよいほど知られていない。また世界的に見ても、誰よりも早く原始貨幣と貨幣の起源との関係について着目した人物であると思われる。本稿は、以上の4人の見解を中心に、多様な観点から原始貨幣と貨幣の起源について検討する。

キーワード：原始貨幣、福田徳三、モース、マリノフスキー、ポラニー

目次

はじめに

- I 原始貨幣とは何か
- II 福田徳三の宗教起源説
- III モースの貨幣起源説
- IV マリノフスキーの貨幣起源説
- V ポラニーの貨幣と市場

おわりに

はじめに

貨幣の起源について考えることはきわめて興味深いですが、考察を進めるうちに実にさまざまな考え方があつてのが分かる。そのなかで一番難しいのは、貨幣の起源といわゆる原始貨幣の関係である。すなわち貨幣が原始貨幣の進化・発展の中から生成したという見解は、それなりに自然で伝統的な考え方であることは否定し難いように思われる。しかし一口に原始貨幣とは言っても、国・地域により、時代により、それに関心を持つ人によって多種多様な考え方があるし、原始貨幣とは何かという点についても合意があるわけではない。もっと突き詰めて言えば、原始貨幣という用語が明確に定義されないまま使われることが多いこともあつて、多くの論者のいう「原始貨幣」と通常の意味での「貨幣」とが同一視される場合も少なくないようである。こうなってくると、原始貨幣とは何かよりも、「貨幣とは何か」が、つまり貨幣の定義自体が改めて問われるようになると言わざるをえない。本稿は、「原始貨幣」に照準を当てながら、こうした根源的な問題についても微力を顧みず考察したいと思う。

本稿の構成は以下のとおりである。まず第Ⅰ節では、「原始貨幣」とは何かについて検討する。次いで第Ⅱ節では、日本の経済学の草分けといわれる福田徳三について考察する。彼の貨幣起源説が宗教に由来する点に焦点を当て、しかもその宗教起源説が原始貨幣と不即不離の関係にあることを明らかにする。第Ⅲ節では、原始貨幣を主な対象とするモースを、第Ⅳ節ではマリノフスキーを、第Ⅴ節ではボラニーを取り上げ、それぞれの貨幣起源説の特徴や問題点などを検討する。最後に「おわりに」として、以上の結果を要約するとともに、原始貨幣を分析の対象とする場合の課題や問題点などについても言及する。

I 原始貨幣とは何か

本稿のテーマ「原始貨幣と貨幣の起源」を検討するにあたって、当然ながらまず最初に、「原始貨幣」とは何かという定義にかかわる問題を明らかにする必要がある。ただし、原始貨幣を厳密に定義することはそれほど容易ではない。

カール・ポラニーは、貨幣の機能を考慮して次のように述べている。「近代社会では、さまざまな貨幣用途に見られる相違はほとんど歴史的あるいは理論的関心以上のものではなく、まれに実用的関心もたれるに過ぎない。その理由は少なくとも最近まで近代貨幣が「多目的貨幣」(all-purpose money)であったことだ。すなわち交換手段がまた他の貨幣用途にも供された。その反対に原始貨幣は特定目的貨幣 (special-purpose money) である。すなわち種々の対象が原則としてそれぞれ異なる貨幣用途をもっている。それゆえ、さまざまな貨幣用途は別々に、そしてたいていは互いに独立に制度化される。その結果、原始貨幣におけるさまざまな貨幣用途に見られる相違は、量化可能物 [貨幣の対象となるモノが計算可能であるという性質をもつ貨幣対象物——引用者] の貨幣用途の理解にとって、実際にきわめて重要である」(Polanyi [1977] 邦訳557-558ページ、傍点は引用者)。この記述から明らかかなように、原始貨幣は特定目的貨幣であるとポラニーは断定するのである(「特定目的貨幣」ないし「多目的貨幣」については第V節で詳述する)。

グリアソンもポラニーと同様に貨幣の機能に着目してそれを2つの種類に分類する。彼は次のように指摘する。「[ローマ帝国のような古代の] 大帝国の貨幣は、われわれが一般に原始的民族の貨幣に特有であるとみなす鑄造されていない金属、衣、穀物あるいは他の類似のタイプの商品の形態をとるにもかかわらず、われわれ自身の貨幣と同様に、“一般的目的貨幣”(general-purpose money)であった。しかし後者の文脈では、そうした商品は通常、

ある種の貨幣的取引に受容されるが、他の物には受容されず、そうした限定目的貨幣 (limited-purpose money) は、本当に貨幣と見なされ得るものかどうか、人類学者の間で多くの議論を引き起こした」(Grierson [1977] p. 15)。

クイギン (A. Hingston Quiggin) は、おそらく世界で最初に「原始貨幣」についての体系的な著作『原始貨幣概説』(*A Survey of Primitive Money*) を記している。彼女はこの著作の冒頭でこう述べている。「経済学者を除く誰でも、‘貨幣’は何を意味するかを知っているし、経済学者でさえ一つの章ぐらいでそれを説明することはできるが、しかし厳密にそれを定義することは不可能である」(Quiggin [[1874] 1974] p. 1, 傍点は引用者)。「われわれの現在の目的にとっては、貨幣という言葉は、社会に認められた交換の手段、価値の標準および富のシンボルという3種類の機能を満たすような形態に限定される」(*Ibid.*, p. 4)。「証拠は、物々交換——商品の交換という通常の意味において——は、貨幣の進化における主要な要因ではなかったことを示している。物々交換において一般に交換される事物は自然に貨幣には発展せず、貨幣として用いられるもっと重要な通常の日常の物々交換には現れない。……素材の多様性と貨幣に対する野蛮な態度の複雑性は一般化を不可能にするけれども、証拠は次のような議論の輪郭を支持しているように思われる」(*Ibid.*, p. 321)。そしてこう続ける。「一般的に受容される貨幣はもっと便利な素材であることが必要であり、貝殻、ビーズあるいは金属におけるような4つの不可欠の特質(持ち運びの便宜、分割の容易性、耐久性、認識の容易性)を見出す。……貨幣として用いられるようになる事物は、主としてある特定の地域に限られないか、もし特定の地域であるなら、特殊な地域あるいは特殊な階層の産物である。そしてそれらは威厳があるか本質的、宗教的ないし神秘的な長所を持っている。すべての原始貨幣の形態の中で、最も普遍的な子安貝(寶貝貨)およびビーズは、貨幣的価値はもちろん神秘的な価値を持ち、……世界の大部分の地域においてなおそれ自身の価値を持っている。

原始貨幣と貨幣の起源

金属は完全な貨幣（‘full-bodied’ money）から代用貨幣（‘token’ money）への変遷を最もよく示している」（*Ibid.*, p. 322, 傍点は原文ではイタリック）。

クイギン女史と並んで原始貨幣の体系的な研究で知られるアインチヒ（Paul Einzig）は、その著作『原始貨幣』（*Primitive Money*）において、「原始貨幣とは何か」について多面的に考察し、それを定義することの困難を繰り返し指摘する。この著作は、第1編（民族学的部門）、第2編（歴史的部門）、第3編（理論的部門）の3つに大別され、第1編では世界の地域別に、第2編では古代、中世、近代の時代別に、第3編では原始貨幣の定義、貨幣の起源、原始貨幣の価値、原始貨幣の機能などについて考察している。その内容を一口に言えば、「原始貨幣」は、地域や時代に応じて実にさまざまであるという。意欲的な労作ではあるけれども、あまりにも煩雑なので、以下では世界の各地域（オセアニア、アジア、アフリカ、アメリカ）に限って原始貨幣の例を紹介することにしよう。

まずオセアニアでは、マットと樹皮で作られた布（サモア）、鯨の歯（フィジー）、石貨（ヤップ）、ビーズ（ペルー [Pelew]）、豚（ニュー・ヘブリディーズ）、羽毛（サンタ・クルーズ）、貝殻（ロッセル島）、貝殻および豚やイルカの歯（ソロモン諸島）、貝殻およびヤム芋（トロブリアンド諸島）、猪の牙や貝殻（とくに子安貝）、犬の歯（ニューギニア）などがある。

次にアジアでは、米（フィリピン）、青銅の銃、水牛、蜜蝋、砂金および衣類の束（ボルネオ）、水牛と雄牛（カンボディア）、子安貝（シャム：タイの旧名）、金塊および砂金（マラヤ：現在のマレーシアの一部）、銀塊および銅塊（ビルマ；ミャンマーの旧名）、穀物（インド）、トナカイや獣皮、毛皮、牛など（ロシアのアジア地域）である。

アフリカに目を転じると、鉄（スーダン）、砂糖（エチオピア）、家畜（ケニア）、子安貝（ウガンダ）、布、金属および奴隷（赤道アフリカ）、子安貝、奴隷、布および先住民の女性 [gin]（ナイジェリア）、砂金（ガーナ）、牛お

よびビーズ（南西アフリカ）などである。

次にアメリカでは、毛皮（アラスカ）、貝殻、毛皮および毛布（カナダ）、貝殻玉（wampum）および他の貝殻（アメリカ合衆国）、ココア豆（メキシコ）、トウモロコシ（グアテマラ）、矢および銃（ブラジル）などが挙げられ⁽¹⁾る。以上から明らかなように、一口に原始貨幣とは言っても、実に多様であり、“所変われば品変わる”とでもいうような印象を受ける。

アインチヒが繰り返し述べるように、真正面から「原始貨幣」を定義することは確かに難しい。ただし彼自身は、原始貨幣の定義として、それを機能の側面から把握することを指摘し、次のように述べている。「原始貨幣の顕著な特徴の一つは、通常、それは近代貨幣によって充たされるすべての機能を必ずしも充たしていないことである。……何らかの事物が最初に貨幣的用途のために採用されたとき、それは通常、ただ1つの、ことによると2つの貨幣的機能を果たし、その貨幣的用途は非常にゆっくりと他の機能を包括するように広げられる。原始貨幣が近代貨幣に取って代わられるようになると、前者は通常その古い貨幣的機能のいくつかをしばらくの間は保持し、近代貨幣と並んで限られて用途にとどまる。その初期の発展と衰退の中間的的局面では、ほとんどの原始貨幣は、近代貨幣が果たすと期待されるすべての機能を

(1) 日本の貨幣の起源についてもごく簡単に言及しておきたい。日本の貨幣の起源を大雑把にみると、いわゆる古墳時代（およそ3世紀末から6世紀頃まで）になると、生産の発達や商業、交通のある程度の発達につれて、稲米、布帛、刀剣、勾玉、獣皮などの商品貨幣が主体であったが、古墳時代の末期には、これらのものの中から、金、銀、銅、鉄といった金属素材が普遍的な交換手段として使用されたようで、これらにすでに「貨幣」の萌芽がみられる。大化改新（645年）を契機に形成された律令国家の時代に入ると、農業や商業の一段の発達に伴って、金属の貨幣の使用も増大し、上流階級では金・銀を貨幣として使用するようにもなった。7世紀後半から8世紀にかけて、中国文化が滔々と流入するに及んで、大陸から渡来した鑄造貨幣（鑄貨）も交易に使用されたと考えられる。この時代には、畿内の諸所に市場経済が発達していたし、鑄貨の使用に慣れた大陸人が多数帰化しつつあったことも、鑄貨の利用を促した大きな要因であると思われる。以上は、日本銀行調査局編 [1972] に多くを負っている。

果たさなかったのである」(Ibid., p. 428)。

以上のように、アインチヒは「民族学部門」、「歴史部門」、「理論部門」の3つの観点から原始貨幣の内実にメスを入れるのであるが、この「歴史部門」の中世と近代のそれぞれに日本が登場する。前者では、「日本の砂金貨幣(Gold Dust Money)」(第32章)と題して、次のように記述されている。「米は、一般的に使用されてきたことで知られる唯一の原始通貨であった。貨幣的用途は、価値を表すほとんどの日本語が、「米」に関係しているように、語源的証拠によって支持される。紀元900年には、米価は米をもって表示され、その単位は、まだ脱穀していない米俵でなされた。……金属貨幣も利用された。713年には税は銅貨で支払われた。10世紀には砂金が交換手段となった。最初それは、便利なサイズ(10両)の小袋に入れられた。しかし後に砂金がしばしば袋の口からこぼれ落ちることが分かって、金の延べ棒に溶解され、重量に応じて使用され、必要に応じて切断された。砂金と金の延べ棒は、十分な鑄貨がなかったので、鑄貨の採用の後でも続いた」(Einzig [1966] 277 ページ⁽²⁾)。内容によって精粗の差はあるものの、日本においても地域別、時代別にさまざまな原始貨幣が登場する。

原始貨幣と言えば、ヤップ島の石貨が代表的・象徴的な存在であろう。ミ

(2) アインチヒは、「原始貨幣と近代貨幣との境界を決定する目的のための試験的なルール」(Ibid., p. 320)を提示する。それは、次の7つである。①紙券通貨と信用貨幣を除く、あらゆる種類の非金属的貨幣は原始的である、②国家による重量と品質の保証を意味する印章ないし記章を持たないあらゆる金属通貨は原始的である、③原始通貨の形で発行されるあらゆる紙券通貨それ自体は原始的である、④鑄貨が重量によって持ち主を替えるとき、もし個々の鑄貨の重さを測る目的が単にそれらが所定の重量であるかないかを確認することであれば、それらは原始貨幣である、⑤すべての切り取られた鑄貨は、たとえそれがうわさによって持ち主を替えたとしても原始貨幣である、⑥すべての商品通貨は、たとえそれが政府保証の力によって持ち主を替えたとしても原始貨幣である、⑦信用貨幣は必ずしも近代貨幣である必要はない。もし商品の形で信用が与えられるならば、それは貨幣経済よりも自然経済に近く、原始的であるとみなされる。

ルトン・フリードマン (Milton Friedman) は、この石貨について次のように述べている。「時代によって驚くほど多様な財貨が貨幣として用いられた。そもそも、pecuniary [金銭上の] という単語はラテン語で牛を意味する pecus に由来する。塩、絹、毛皮、干し魚、葉巻、羽、それに第1章で取り上げた石 [ミクロネシアのヤップ島における石貨 (stone money—引用者)] も貨幣として用いられた。他にもビーズ、子安貝、アメリカ・インディアンが用いた貝殻玉や他の種類の貝も、原始的な貨幣形態である」(Friedman [1992] 邦訳31-32ページ、傍点は引用者)。ただしフリードマンが見落としただきな問題は、ヤップ島における石貨が貨幣として用いられたと断じている点である。というのは、石貨は、通常の貨幣のように財貨の購入のために用いられたのではなく、冠婚葬祭の時の一種の儀礼的な贈答の品として使用されてきたからである。また、石貨の形状は円盤形で、大きなものになると直径3メートル、重さ5トンにも達するとされる。“世界最大の貨幣”といわれる所以である。そうしたものは一定の場所に据え置かれたままで、所有者が変わっても場所を変えることはない。それゆえ、自由に所有者を変える通常の貨幣とは根本的に異なっているから、石貨は貨幣とはみなしがたいというのである。⁽³⁾

(3) ヤップ島の石貨が貨幣か否かはかなり微妙な問題である。アインチヒは、その石貨について、それらを無差別に扱うのではなく、大きな石貨と小さな石貨を区別する必要があると指摘する。というのは、後者は、自由に頻繁に地域の内部を循環して取引に用いられるけれども、前者の大きな石貨は、ほとんど日々の取引には用いられないからである。確かに、交換手段としての石貨の使用には限界がある。アインチヒはその理由として、①石貨は純粋にヤップ島内部の貨幣であり、他の島嶼との取引は主に物々交換ベースで行われた、②ヤップ内でさえ、大部分の取引は何らかの種類の貨幣の媒介なしに物々交換の形態をとった。③ヤップでは石貨以外にも、それに次いで人気のある真珠貝や頻繁に支払い手段として使用されるココナッツ、販売した財貨の支払いに用いられるタバコ、計算単位として役立つタロイモ籠や数杯のシロップなどが貨幣として用いられた。こうした点を考慮すると、「利用可能な適切なすべての論拠に立つと、“ヤップの石貨”が本当に貨幣と考え得るかどうかの質問に答えることは、おそらく、いくぶん躊躇するものの肯定的に (in a

原始貨幣と貨幣の起源

以下の記述では、ヤップ島の石貨を含む原始貨幣について説明されている。少し長いが引用しよう。「どのような貨幣も……記号と象徴の両面を合わせ持つが、原始貨幣は象徴、現代の貨幣では記号の側面が目立つ。しかし貨幣にあつては、象徴と記号はまさにコインの両面に似て、つねに一方の顕在は他方の潜在という関係にある。記号と象徴の両側面、あるいは顕在と潜在を同時に合わせ持つ全体性が、貨幣である。原始貨幣の素材は実に多種多様である。多様な貝、各種ビーズ、布、マット、ドラム、ペンダント、ボタン、鉄棒、銅棒、潮、鯨歯、牛、水牛など、細かくみれば各民族ごとに異なる形態・素材の貨幣がある。装身具に見まがう貨幣も多い。いうまでもなくこれら貨幣は、近代市場経済での貨幣とは異なり、財・サービスの売買に日常的に使われるものではない。貨幣の主な機能は与えた損害に対する代償支払いである。損害による欠損は支払われた貨幣で埋め合わされ、復讐の惨事が防がれる。あるいは貨幣は祭祀における供物にも用いられる。花嫁に対する代償支払いも同様である。例えば、ヤップ島では、婚姻に際して男側からは貝貨^{かい}が、女側からは石貨が相手側に贈られる。争いの調停、規則違反に対する贖罪にも使われる。すなわち、貨幣は社会秩序を支える力の象徴である。したがって、貨幣所有者はこの力を保有することであり、貨幣蓄積は社会的威信を高め、固持することである」(友杉 [1994] 160ページ)。非常に明快な説明であり、「原始貨幣とは何か」について有益な示唆を与えてくれる。以

somewhat hesitant affirmative) 許される」(Einzig [1966] p. 40)。ヤップ島については、染木 [1945] 第8章(「ヤップ土俗断片」も興味深い。この章の冒頭にこう書かれている。「ヤップは我が南洋委任統治領中最も古俗の保存されている所である。それは島民等の特別頑固な性質にもよるが、島内の地味、地形が肥沃でなくて狭小なため外来者の功利的な眼から免れるとか、あるいは交通産業上の価値低きがために郵船等の寄港がほんの申し訳的であるにもよるであろう。……ビロウ樹の実で唇を真っ赤にし、踵まで垂れ下がる腰囊を着けたヤップ女を見得ることは、われわれ自然論者にとって愉快な事実である」(同311ページ、漢字や仮名は一部修正)。この引用に触れられているように、ヤップ島は第一次大戦後日本の委任統治領となり(それまではドイツ領)、第二次大戦中は陸海軍の基地となった。

上の検討から原始貨幣の条件あるいは特徴として少なくとも言えることは、①原始貨幣は近代の貨幣の機能の一部しか果たしていない、②原始貨幣は一般に地域・時代・民族などによって異なり、その素材や形態がきわめて多様である、③原始貨幣は財・サービスの売買に日常的に使われるものではなく、損害に対する代償支払いや争い・規則違反に対する贖罪、あるいは祭祀における供物など社会秩序の安寧を確保・維持するために用いられる、といったことが考えられる。以上の原始貨幣に関する見解を踏まえて、以下では福田徳三、モース、マリノフスキー、ポラニーの貨幣起源説について検討することにしよう。

II 福田徳三の宗教起源説

貨幣の起源についての研究はいくらでもあるけれども、その起源を何に求めるかは依然として明らかではない。物々交換の不便を回避するために交換手段としての貨幣が導入されたとのよく知られた伝統的な見解をはじめとして、論者によって実にさまざまな考え方が提起されている。その中で意外に思われるかもしれないが、古くから指摘されているものに貨幣の起源を宗教に求める考え方がある。貨幣の起源が宗教（あるいはそれと関連する祭祀）に依拠するという考え方は、内外ともに多くの論者によって指摘されている。

日本の経済学の草分けの一人とされる福田徳三の貨幣起源説は、まさに貨幣生成の起源を宗教に依拠する代表的かつ最も古い見解であると思われる。宗教との関連で貨幣の起源を論じる福田の貨幣起源説は、他のそうした研究に比べて何よりも体系的であり、類似の世界的な研究の嚆矢をなすといっても決して過言ではない。それにもかかわらず、筆者が知る限り、福田のパイオニア的研究を取り上げ、真正面から論じた著作は皆無であると断じて間違いないのではなかろうか。

日本の経済学の草分けと目される福田徳三は、「貨幣の起源」という難解

原始貨幣と貨幣の起源

なテーマについてユニークな考え方を披歴している。この福田徳三の貨幣起源に関する見解は、一口で言えば、貨幣の起源は宗教に由来するというものである。彼の貨幣起源説についての最初の見解は、1889年、『国家学会雑誌』（第24巻第7号）に投稿した論文、「祓除ト貨幣ノ関係ニ就イテノ愚考」に載っている。貨幣の起源を宗教に求めた日本で最初の体系的でユニークな論文と言えよう。次いでこの論文をベースにして、1925年、「貨幣の起源および本質」（『流通経済講話』（第9章）を公表している。以下では、これら2つの論文に基づいて彼の貨幣起源説の概要を明らかにしたい。

まず最初の論文「祓除ト貨幣ノ関係ニ就イテノ愚考」を取り上げる。福田は、この論文の冒頭で、次のように述べている。「我国上古ノ習俗中、祓除ナルモノガ重要ナルモノト看做サレテアツタコトハ誰モ皆知ツテ居ル所デアリマス。然シ此習俗ガ経済上ニ関係深キモノナル可キコトハ、余リ認メラレテ居ラヌ様デアリマス。併シ専門史家中ニハ疾クニ此点ニ思及バレタ人ハ無論アルコトト思ヒマス」(福田 [1889] 89ページ⁽⁴⁾)。そして福田は専門史家の一人として横山由清を取り上げ、彼の「日本上古売買起源及貨幣度量權衡考」と題する論文における次のような一節を引用する。「上古人類ノ聚合セルヤ各自耕シテ食ヒ織リテ衣ル其^{そのあまり}余アルハ貯蔵シテ以テ後ノ欠乏ニ備フ而シテ彼レニ足ラサルアリ此レニ余マレルアルトキハ彼此相易ヘテ以テ其用ニ供スコレヲ交易ト云フ。上古罪過アル者ニ^{はらえもの}祓物ヲ課シテ以テ其罪ヲ償ハシメ、海山ノ幸ヲ相易エシ事ナトモ^{すなわち}即 交易ノ義ナリ」(横山 [1879] 209-210ページ)。福田はこの記述についてこう述べている。「横山氏ガ^{はらえもの}祓物ヲ出スコト交易ノ一起源ナラント申サレタハ余程卓見デアアルカト思フノデアリマ

(4) この論文は漢字・カタカナ混じり文であり、しかも旧仮名遣いが用いられているために非常に読みづらい箇所が多い。筆者は、現代語に直すかそのまま引用するか悩んだが、福田徳三の文体の持ち味を理解してもらうことも大切だと考えて、原則としてそのまま引用することにした。また、読み方の難しい漢字にはルビを付した。

ス」(福田 [1889] 91ページ)。

福田徳三は本居宣長の『古事記伝』の次のような一節を引用する。「今俗ニ物ヲ買タル直あたひ(値と同源：広辞苑)ヲ出スヲ払フトモ払ヒヲスルトモ云ハ、祓除ノ意ニアタレリ。又コレヲ済マスト云モ、すます令レ清ノ意ニテ、祓除ノ義ニ通ヘリ」(本居宣長全集第九卷(古事記伝六之卷)264ページ)。さらに福田は次のような古事記伝の一節も引いている。「凡そ波良比おほはらひにニツあり。其ノ一ツは、伊邪那大神の阿波岐原あわぎはらの禊祓みそぎの如し、一ツは、此こゝの解除はらひノ如シ。是れ罪犯つみおかしある人に科せて物【祓具はらへつものと云、書紀に見えたり。天武卷には、此こゝヲ祓柱はらへつものと書けり】を出し贖あがないするなり。カカレバ、その事も意も二別なるに似たれど、本は一なり。……犯罪はらふを解除けがれるも、穢汚みそぎを清むる禊みそぎと全く同じ」(本居宣長全集第九卷(古事記伝九之卷)383ページ)。「もし以上の愚考が大過ないものとするならば、祓除という習俗はわが国上古の宗教的研究に重要な一事であるのみならず、また経済史の研究上にも非常に肝要にして看過すべきでない事柄かと考えられるのであります。波良比はもと罪と穢れを払うという意味に用いられ、延ひいては一切の債務を決済する支払いのことも言い、祓具はらへつものは贖罪あがないの料の意より及んで、支払いの用具のこととなつたとすれば、同時に罪を贖あがないう「あがふ」と物を買う「あがふ」との間にも何らかの関係があるのではないかとの考えを惹起せしめるのであります」(福田 [1889] 91ページ)。このように福田は、祓除という概念を中心に日本古代の習俗を説明し、それが当時の宗教と密接に関係すると示唆するのである。

次に福田徳三は西洋経済史に目を転じてこう指摘する。「西洋の経済史について考えますに、神への献貢から延ひいては君主への調貢[みつぎもの——引用者]が財の流通交換の一起源をなしたことは、今日ほとんど動かすことのできない定説となっているようでありまして、ビュヒャー先生のようなまったく交換なき流通なき自足経済ということに大いに重きをおいて説かれる学者も、このような一方的支払いが、交換の起源となるということは認めてお

原始貨幣と貨幣の起源

られます」(同91-92ページ、傍点は引用者)⁽⁵⁾。

貨幣の起源について、福田徳三は最初の著書『流通経済講話』(1925)の第9章(「貨幣の起源及び本質」)において、いっそう体系的で洗練された議論を展開する。この書物は、上に引用した論文「祓除ト貨幣ノ関係ニ就テノ思考」の36年後に公刊されただけに、漢字とひらがなの文体は読みやすくなっている。しかしもっと特徴的であるのは、前掲論文に比べて貨幣の起源と宗教の関係に焦点が当てられ、両者の関係が前面に押し出されていることである。以下、この点を中心に福田の見解を追うことにしよう。

さらに福田徳三は、上に述べた祓除の重要性に着目しこう論じている。「祓除ノ習俗ハ交換売買ノ事ト関係アル如ク、マタ貨幣ノ起源及発達ニ就テモ甚ダ密接ナル関係ヲ有シテ居ル様デアリマス。貨幣ハ交換ノ要具、価値

(5) この引用文には2つの点に留意する必要がある。一つは、福田徳三が「ビュヒャー先生」とさも親しそうに呼んでいることである。この理由は彼が1896年から文部省の派遣でドイツのライプツィヒ大学やミュンヘン大学に留学し、カール・ビュヒャー(Karl Bücher)やルヨ・ブレンターノ(Lujo Brentano)に師事し、1900年にはミュンヘン大学から博士号を授与されているからである。「ここで概観している期間[1870年から1914年まで——引用者]のドイツの経済学者を考えると、人々の頭に最初に浮かんでくる学界の指導者たちの名前は、もちろん、前章において挙げられたような名前、とりわけブレンターノ、ビュヒャー、クナップ、シュモラー、ゾンバルト、ワグナー、およびマックス・ウェーバーである」(Schumpeter [1954] 邦訳(下)191ページ)。これからも分かるように、福田徳三はブレンターノやビュヒャーという当時のドイツを代表する学者に師事したのであり、いかにも親しそうに「ビュヒャー先生」というのも道理である。

もう一つは、上に引用した記述のなかの傍点部分をどう解釈すればよいかという点である。福田徳三が一人合点しているだけであり、ほとんどの読者には理解できないであろう。筆者も苦勞した挙句、ようやくハドソン(Michael Hudson)の次のような一文にたどり着いた。ハドソンは次のように述べている。「ビュヒャーは古代の社会関係が現代のそれと異なっているかを問うた。彼は、いかに生産や分配が近代的なタイプの市場なしに機能したかを強調して経済考古学の領域を先導し、そしてまた非市場的交換が機能する方法への洞察を得ようとアフリカおよびアジアの種族共同体を研究する途を切り開いた」(Hudson [2000] p. 305, 傍点は引用者)。つまり「非市場的交換の問題は、ビュヒャーが彼の初期の社会から発展させる重要なテーマなのである」(Backhouse [2000] p. 9, 傍点は引用者)。

ノ尺度，トシテ起コッタト云フ旧説ニハ今日歴史的研究ヲ重ンズル学者ハ余リ信服シテ居ラヌ事ハ今更繰り返スマデモナイコトデアリマシテ，演繹的ニ今日ノ發達シタ貨幣經濟ノ世ニ養ハレタ頭ヲ以テ唯ダ只ダ理屈責メニ貨幣ノ本質ト起源ヲ説クコトノ非ナルハ凡ソ進歩シタ学者間ニハ廢レテ仕舞マシタ。貨幣ハ現今ニ於テモ支払要具タルコト，其起源モ亦支払要具タル事ニ存スルコトニ就テハ，余程守旧的ナ頭ヲ持テ居ル人ノ外ハ一様ニ認メテ居ルコトデ，……私ハ我邦祓除ノ事實ハ殊更ニ此支払要具タルノ実ヲ証明スル力ガアルコトカト考ヘルモノデアリマス」(福田 [1882] 92ページ)。このように福田徳三は，支払い手段としての貨幣の機能を重視し，また貨幣の起源もこの支払い手段としての貨幣の機能に由来するといっているのである。

福田徳三は，古代日本の習俗や宗教，貨幣との関連について，「私はわが国上古の生活においてまた貨幣と宗教および法制との密接な関係があること，祓除の習俗これを証することと考えるものであります」(同94ページ) と言うのである。この貨幣と宗教の関係については，すぐ後に詳述する。

福田徳三は上に引いた文献以外にも，記紀(古事記と日本書紀)，平田篤胤の『古史伝』，『俚言集覽』，ドイツ語文献などを駆使して，貨幣の起源と宗教の間に緊密な関係が存在することを論証しようとする。その博覧強記には驚嘆するばかりである。以下では，福田徳三の『流通經濟講話』に目を転じる前に，彼とほぼ同時代であり，貨幣の起源についての考え方もよく似ている内田銀蔵の見解について簡単に検討することにしよう。

内田銀蔵はその著『日本經濟史の研究』において，『古語拾遺』を引用して，神に捧げるものとして熊皮，鹿皮，布などを挙げ，次のように述べている。「獸皮を以って神を祀るは太古の遺俗[今に残る昔の風俗——引用者]である。このように祭神の用品には種々の物があって決して一種に限らない。しかしさらに考察を進めると，布帛すなわち和幣にぎては神に献じる贈り物の中でとくに普通でかつ重要なものであることに思い当る。ニギテまたはヌサはほ

原始貨幣と貨幣の起源

とんど神に奉獻するものの代表物となり、したがって和幣の語は場合によってはすべて神に奉る物の汎称〔総称——引用者〕として使われた。……上古のとき神に献じる物のなかで最も普通でかつ主要なものは、また当時人が相互の間においても贈遺（贈与）払い渡しの目的に最も普通にかつ主に用いられたものである〕（内田 [1924] 353ページ⁽⁶⁾）。「種々な財が時と場合によって、等しくいろいろな払い渡しの用に役立ったことであろう。すなわち当時の払い渡しの形式は、なお原始的なものだったようである。そして種々な物のなかで布帛は非常に早い時代より普通に、また主要な払い渡しに使用されたようである。しかし、果たして布帛の使用は通貨の名を下すことのできるほど発達していたかはまだ明らかにこれを徴証することはできない。稲米は寧楽朝〔奈良時代——引用者〕以後の例より推測すれば、上古においても布帛とともにごく普通に払い渡しに使用されたであろうと想像される。しかし余輩〔われわれ——引用者〕はまだ古史において、その証憑〔しょうひょう事実を証明する根拠——引用者〕を認めることはできない。奴婢、牛馬、勾玉、劍、鏡などは場合によりいずれも多少払い渡しの目的に使用されたようである。しかしながら、いずれも払い渡しの通用品と言い得るほど普通に用いられたとは認められない〕（同358ページ）。

さて福田徳三に立ち戻ることしよう。彼はこう述べている。「経済上の制度の多くは、決して有意的に発明され、創造されたものでなくて、長い年月の経過の間に、自ずから出てきたものであります。貨幣もそうでありまして、いずれの時代において、誰かが特に創意して貨幣を造ったというものではありません。まして実物交換の不便を痛切に感じる結果、何とか工夫はないかと言って、貨幣を造出したなどというような作り話に類したことは実際の実事として決してないことであります。貨幣はあたかも人間の言語のごと

(6) 内田銀蔵の著作も部分的に難解な表現（漢字を含む）が出てくるので、なるべく分かりやすく改めた。

きものでありまして、いつ誰が発明したということなく、自然に発達してできたものであります」(福田 [1925] 472ページ、傍点は引用者)。ジェボンズのいう「欲求の二重の一致」の不便を克服するために貨幣が創出されたというのは「作り話」にほかならず、貨幣は自生的(自然発生的)に生じたと断じるのである。

福田は、貨幣の起源について以下のような自説を展開する。「通説によりますと、貨幣の起源は、人間がその日常の生活を維持していくうえにおいて、是非なければならないものとして、初めてこれを用い出したというのでありますが、これは実際の事実に全然相違していることと存じます。貨幣の起源は、われわれの日常の生活にむしろ縁の遠い、あるいは全然縁のない、それ以外の方面から出てきたと申さなければならないのであります。売買交換あるいは貸借ということは、必要欠くべからざるものについては行われない方が原則であったのであります」(同483-484ページ)。

彼はこうも述べている。「自足経済の世の中におきましては、日常の生活を支えるために、是非なければならない絶対的必要品を、他人から借りるか、買うとかいうことに依頼するくらい、不安全な、また危険なことはありません。日常の生活に是非なければならない物だけは、必ず自ら生産し、しかも若干の余裕があれば、これを貯蔵しておくというのが、人類普遍のやりかたであります。多少なりとも売買交換、貸借などをするということは、必需品についてはなくて、むしろ余裕のある、あり余った物についてであります。自分の所で作った物に余剰がある、それは自分の所で用いても、用いられないことはないけれども、それを他の人に売って、その代わりに他に必要の物を買ってくる方がよいから売る。また買う方の者も、それは是非無くてはならないものではなく、無いなら無いでも済まされるけれども、あればさらに多くの利用者が買うというので、装飾品とか、贅沢品とかいうものについて、売買、交換、貸借ということが初めて起こってきたのであります」

原始貨幣と貨幣の起源

(同484ページ)。こうして彼は、人々が日常の必需品よりも、装飾品や贅沢品などの奢侈品を売買、交換、貸借の最初の対象とするようになったという「通説」に反する考え方を披露するのである。この福田徳三の説明において「余裕のある、あり余った物」というのは、必需品のうちで「あり余った物」という意味に解釈できそうであるが、それは「奢侈品」を意味するようである。そのことは次に引いた記述から明らかである。

福田は、貨幣の起源について当時としてはきわめて異例の斬新な見解を提起する。「貨幣の起源は、この意味の売買、交換、貸借が始まってから起こってきたではありません。それよりももっと前からあったのであります。すなわち日常の生活に必要な品はもちろんのこと、余裕品といえども、何ら流通によらない時代におきましても、ある種類の価値の移転、ある種類の流通はすでに存在していたのであります。それは何であるかという、一方的な流通、一方的な価値の移転であります。売買、交換、貸借は、双方向的な移転であります」(同485ページ)。すなわち彼によれば、貨幣の起源は売買・交換に先立つというのである。「その[一方的流通の]相手とは何であるかという、必ず己おのれよりも権力の強い者、己よりも社会的地位の高い者であります。すなわち、一部落の酋長であるとか、一国の君主であるとか、また幽明界における神様であるとか、または老人、年長者であるとかいうのがこれであります。酋長や君主に奉るところの一方的流通は、いわゆる貢納でありまして、神様にささげるものは、犠牲、奉幣であります。……主権者たる事実の最も具体的に現れるのは、その者が無償的に、しかも強制的に多数の臣下の所有物を徴発しようということでありまして」(同487ページ)。

福田徳三の次のような独特の見解も傾聴に値する。「神様の怒りに触れた場合に、神様に犠牲を供してその怒りを解く、あるいは神様の特別な恩恵を請い願うがために、何物かを供するというようなものであります。……貨幣はすなわちこの貢納・奉幣の場合において、君主なり神様なりに献ずるもの

で、貨幣はこれから起こってきたものと存じます」(同489-490ページ)。そして「買う」という行為の意味について次のような大胆な推測を行う。「買うというのは、おそらくはこの「あがなう」という言葉が約まったのでありましょう。すなわち代価を払って購^{あがな}うことを買うというのであります。罪^{あがな}の贖^{あがな}いをするには祓^{はらえもの}柱^{けが}をもって瀆^{はら}れを祓^{はら}い、品物を買う時には、代金をもって払うのであります。祓の字と払の字は、漢字では違いますけれども、わが国の言葉では同じでありまして、罪をはらう、代金をはらうので、そうして払ってしまえば、罪は贖^{あがな}われ、品物は購^{あがな}われるのであります」(同499ページ)。

福田徳三は、宗教と貨幣の起源との関係について立ち入った考察を行っている。彼はこう述べている。「祓除^{はらい}に充てられる要具、すなわちわが国の昔の言葉で祓^{はらへつもの}柱と称えましたのは、すなわち貨幣であろうと思います。神様に対して罪を贖^{あがな}うところの祓柱、祓具、祓物、経済上において他人に対して負っている債務を決済するために充てるところの代物^{しろもの}、これらはすなわち貨幣であろうと存じます。現に今日でも、買い物に対して払う価^{あたい}のことを代^{だい}と言っております。代とは日本の昔の言葉で「しろ」と申しました」(同501ページ)。

「歴史上の事実について見ますと、貨幣の授受、すなわち価値の移転ということの最も古い形は、やはり贖^{しよくざい}罪ということにあったことは、ほとんど疑いをいれないのであります。……わが国におきましては、貨幣の起源は、主として神様への奉幣物たるにあったことは、右に申し述べたとおりで、よほど明瞭であります。西洋においてそれほど明瞭でないということは、神様の奉幣物よりも、むしろ政治上の権力者である君主・酋長への貢献物として関係があったからであろうと存じます」(同508ページ)。

福田徳三は「貨幣に下す最後の定義」としてこう述べている。「貨幣は実質価値、すなわち金属価値を持っているということは、貨幣を一般に流通さ

原始貨幣と貨幣の起源

せるための非常に肝要な一つの要件には相違ありません。しかしそれは、唯一の要件でもなければ、またその要件があるから、必ず貨幣となるというでもないであります。貨幣が実質価値を持っており、金属価値を持っていることが、なぜ貨幣の要件であるかという、実質があるということが、一般に流通させることを保証する力となるからであります。ゆえに適切に言えば、これはまだ一つの条件に過ぎないのでありまして、根本的本質ではないのであります。根本的本質は、何であるかという、価値移転の要具にして、その価値移転の要具たるものが、一般的であるということであります。一般的であるということは、部分的あるいは一時的ではないということであります。時と所のうえにおいて何らの制限を受けずして、価値移転の要具たりうるということ、これが貨幣の根本的本質であります。……貨幣とは、一定の経済圏内において、時、所、人、市場、その他いっさいの具体的制限を被ることのない、一般的価値移転の要具であるとするのが、最も当を得ていると存じます」(同550-551ページ、傍点は引用者)⁽⁷⁾。福田は、貨幣が債務決済の手段であるとも強調して次のように言う。

「貨幣は債務決済の用具なりというべきであります。貨幣とは、それを交付しさえすれば、一定の債務は無条件で、また決定的に決済されてしまつて、後に何も残らないようになるものであるという意味において、債務決済の要具であるというのであります」(同568ページ)。

さらに、福田徳三は貨幣と宗教の間に密接な関係があることを論証しようとする。まず、こう指摘する。「なぜ物を買うのに代価を出すことを払うといふかと言えば、他人から財の移転を受けますと、その人に対してそれだけの債務ができます。この債務は、わが国の昔の考えでは、一つの潰れ^{けが}と見たのではないかと思います。経済上における一種の責任を負担していること、

(7) 福田徳三のこの指摘は重要である。なぜなら、これは第V節で検討するカール・ポラニーの貨幣論に対する有力な批判となっていると筆者には思われるからである。

あたかも罪を犯した者が、神様に対して一種の責任を負っているようなものであります。神様に対する責任は、^{みそぎ}禊^{はらい}なり、^{あがな}祓^ななりによって、これを瀆^{あがな}わなければならないし、経済上においては、ある人から価値の移転を受ければ、その債務を果たすまで、それだけの^{けが}瀆れを負っているのであります。これに対して代価を提供する、すなわち代価を払いますと、その^{けが}瀆れたところの責任が解除されるのであります」(同499-500ページ)。

福田徳三は最後に、『流通経済講話』を次のような一文で結んでいる。「今日においても貨幣の引き渡しは、決定的、最終的、無条件的であります。他の具体的な物の引き渡しでは、このごとく決定的、最終的、無条件的にはなり得ないのであります。でありますから、貨幣は決定的、最終的、無条件的な債務決済の用具なりと申すべきであります。何もそうくどくどしく言わなくとも、流通用具、価値移転の用具と言え、自ずからそのうちにこの意味は含まれているのであります」(同569ページ)。「決定的、最終的、無条件的」という言葉が3度も繰り返し登場する。結局、福田徳三の貨幣の定義からすれば、「原始貨幣」は貨幣ではないのである。

以上の福田徳三の見解は、「貨幣とは何か」という根源的な疑問について改めて考えるチャンスを与えてくれる。⁽⁸⁾そして彼自身は「原始貨幣」という言葉をどこにも使っていないけれども、貨幣の起源を宗教に求める彼の著書に登場する貨幣は、原始貨幣そのものにほかならない。この点で彼の見解は、以下に検討するモース、マリノフスキー、ポラニーの見解と基本的には

(8) 福田徳三と同様の見解、すなわち貨幣の起源が宗教に依拠するという考え方(宗教起源説)は、ベンベニスト(Émile Benveniste)にも見られる。彼によれば、ドイツ語の「貨幣」を意味する Geld という言葉は3通りの変化をたどってきたとされる。すなわち「最初は宗教的な意味で、神格に対する支払いとしての犠牲、次は経済的な意味で、商人たちの仲間結社、もう一つは法的な意味で、罪を買い取って自由になるための支払いおよび和解手段としての贖いである」(Benveniste [1969] 邦訳68ページ、傍点はイタリック)。その他、Armstrong [1978] Chap. 11, Einzig [1966] Book Three, Chap. 14 も貨幣の起源と宗教の関係を重視する。

同じであると考えられるのである。

Ⅲ モースの貨幣起源説

フランスの人類学者・民族学者として知られるレヴィ・ストロース (Claude Lévi-Strauss, 1908-2009) は、モース (Marcel Mauss, 1872-1950) についての長文の序文でこう述べている。「マルセル・モースの教示ほど、いつまでも秘教的魅力を失わないものは少なく、また同時にこれほど影響を及ぼしたものも少ない。他ならぬその濃密さのゆえに時として不透明ではあるが、しかしまさしく知性のひらめきによって描き出されたものであるこの思想、途中の思いもよらぬものによって問題の核心へ導かれるときの眩惑されそうな曲折の多い語り口、この人を知り、この人の話を聴いたもののみがこれらのもつ豊かさを完全に感得することができ、これらの功罪を評価することができる」(Mauss [1968] 邦訳 1 ページ)。モースから大きな影響を受けたとされるレヴィ・ストロースの正直な感想であると思われる。モースの見解が、「秘教的魅力」を有しているかどうかは読者の判断にゆだねなければならぬけれども、彼の分析がそうしたものを感じさせる宗教的で原始的な背景をもっていることは否定できない。

モースの『贈与論』に立ち入る前に、あらかじめその概要を述べておきたい。一口で言えば、『贈与論』は、贈与という非経済的な取引から経済的な交換取引が生じたとする従来にはないユニークな見解を展開する。モースは、メラネシアやポリネシア、アメリカ先住民などの豊富な資料を駆使して、文字どおり「贈与」を中心とする人類学的・民族学的な比較研究を行っている。『贈与論』におけるモースの比較研究では、贈与には受け取るだけでなく、返礼の義務があり、このような義務的贈与システムが交換の原初的形態であると主張する。こうしてモースは、交換取引を贈与と贈与に対する返礼としての義務的贈与の体系として把握する。彼はこう述べている。「未開あるい

はアルカイックといわれる社会において、受け取った贈り物に対して、その返礼を義務づける法的・経済的規則は何であるか。贈られた物に潜むどんな力が、受け取った人にその返礼をさせるのかという問題である。これこそ、われわれが他の問題を指摘する際にも、とくに注目したい問題である。われわれは数多くの事実によってこの問題に回答を与え、さらにこれに関連する問題のあらゆる研究がどんな方向に向けられるべきかを示したいと思う」(Maus [1925] 邦訳14ページ)。以上が、ごく簡単なモース『贈与論』の骨格をなす内容である。⁽⁹⁾

モース『贈与論』には、「全体的給付体系」をはじめとして、ポトラッチ、マナ、タオンガ、ハル、ヴァイグア、クラ、ギムワリ、ワンバムなどといった日常聞きなれない言葉ないし概念が頻出する。これらは、『贈与論』におけるキーワードであって、正確に理解しなければモースの考え方をほとんど理解できないと言っても過言ではない。以下、こうした言葉ないし概念についてモースの説明を引用しながら、彼が力点を置く「全体的給付体系」の内実に迫ることにしたい。

モースは「全体的給付体系」について次のように説明する。「現代に先行する時代の経済や法において、取引による財、富、生産物のいわば単純な交換が、個人相互の間で行われることは一度もない。第1に、交換し契約を交わす義務を相互に負うのは、個人ではなく集団である。契約に立ち会うのは、クラン(氏族)、部族、家族といった法的集団である。ある時は集団で同じ

(9) モース『贈与論』の翻訳には、有地享・伊藤昌司・山口俊夫訳『社会学と人類学1』(弘文堂, 1973)と、吉田禎吾・江川純一訳(ちくま学芸文庫, 2009)の2つが基本的である。本稿では原則として後者を用いたが、必要に応じて前者も参照した。また、引用文における傍点については、いずれの訳書とも、原著によるのか訳者が付したのかを明示していない。やむを得ないので、本稿では傍点は訳書どおりにした(ただし、2つの訳書の間に傍点の有無がある場合には、後者にしたがった)。

原始貨幣と貨幣の起源

場所に向かい合い、ある時は長を仲介に立て、またある時は同時にこれら2つのやり方で互いに衝突し対立する。さらに彼らが交換するものは、もっぱら財産や富、動産や不動産といった経済的に役に立つ物だけではない。それは何よりもまず礼儀、饗宴、儀礼、軍事活動、女性、子供、舞踊、祭礼、市いちであり、経済的取引は一つの項目に過ぎない。そこでの富の流通はいつそう一般的できわめて永続的な契約の一部である」(Maus [1968] 邦訳17ページ)。そしてこう付け加える。「このような給付と反対給付は、進物や贈り物によってどちらかと言えば任意に行われるが、実際にはまさに義務的な性格のものであり、これが実施されない場合、私的あるいは公的な戦いがもたらされるようなものである……。われわれはこれらすべてを「全体的給付体系」(*systeme des prestations totales*) と呼ぶことを提案した」(*Ibid.*, 邦訳17-18ページ)。「この制度の最も純粋な型は、アメリカ北部の諸部族における2つの胞族の共同関係によって示されているように思われる。そこでは儀礼、婚姻、財の相続、法的小および経済的利害の関係、軍事的、祭儀的地位などのすべてを部族内の2つの半族間で補い合い、協同することが期待されている。例えば、競技は特にこの2つの半族によってとり仕切られている。アメリカ北西部のトリンギット (Tlingit) 族とハイダ (Haida) 族には、「2つの胞族が互いに敬意を表す」という言葉があるが、これらの習慣の性格が見事に表現されている」(*Ibid.*, 邦訳18ページ、傍点は引用者)。

『贈与論』の中心概念である「全体的給付体系」について立ち入って検討する前に、モースのいう胞族および半族とは何かを知る必要がある。彼は胞族や半族という言葉を用いながら、それらについて何ら説明していない。胞族や半族についての知識は、古代社会の社会構造を理解するためには非常に重要であると思われるからである。しかも筆者の見るところ、これらについて体系的に明解に述べている文献は皆無に近い。唯一の例外は、モルガン (L. H. Morgan) の『古代社会』であろう。以下では、この書物に即しながら

ら胞族について解説を加えることにしよう。

まず胞族^{ほうぞく}（英語名 phratry）というのは、本文にもあるように、オーストラリアの部族あるいはアメリカ北西部の部族を構成するグループであり、氏族—胞族—部族の3段階から構成される組織から成っている。組織の末端の氏族は兄弟関係などにある血族集団であり、社会の基礎的な単位集団を構成している。その上位に、氏族グループをいくつか統合した胞族というグループが存在し、さらに最上位にいくつかの胞族のグループを統合した部族が形成されている。そして、氏族、胞族、部族の3つを統合した全体が一つの集団を構成し、集団全体として共通の規範を共有しているのである。

モルガンは、氏族—胞族—部族から成る3段階構成組織の下部組織である氏族について次のように説明する。「氏族制度は人類の最も古い、そしてまた最も広く行きわたった制度の一つをわれわれに示している。それはアジア、ヨーロッパ、アフリカおよびオーストラリアの古代社会におけるほとんど普遍的な政治形態の方式を提供した。それはそれによって社会が組織され、結合される手段であった。それは野蛮状態に発し、未開状態……を通じて継続し、政治的社会の樹立されるまで存続した」(Morgan [1877] 邦訳97ページ)。「氏族制度が普遍化したあらゆる場所において、そしてまた政治的社会が樹立されるのに先立って、われわれは氏族社会を成している人々および民族を見出す、それ以上のものは見出せない。国家は存在しなかった。彼らの政治は本質的に民主的であったが、それは氏族、胞族、および部族の組織されている原則が民主的であったからである。この最後の主張は通説には反しているけれども、歴史的に非常に重要である。その真実であることは、アメリカ土人の氏族、胞族および部族、またギリシャ人およびローマ人の同じ組織を連続的に考察するにしたがってたどり得られるであろう。組織の単位である氏族が本質的に民主的であったように、氏族から構成された胞族も、胞族から部族および部族の連合あるいは合体によって形成された氏族社会も、必

然的に民主的であった」(Ibid., 邦訳102ページ)。

「同一胞族内の氏族は相互に兄弟氏族と呼ばれ、他の胞族のそれが、彼らのいここ氏族と呼ばれることは、他の部族の間におけると同様である。数多くの部族における胞族の構成の年齢からして、胞族は状態の変化に適応するため、時々彼らの氏族の修正を受けることがあるように思われる。ある氏族は繁栄し、そして氏族のメンバーも増加するが、他の氏族は災害によって衰退し、さらに他の氏族は消滅するに至っている。したがって、ある胞族から他の胞族への氏族の移動は、各胞族における成員の数のある程度の平均を保持するために必要であることが見出された」(Ibid., 邦訳135ページ)。モースによれば、「胞族は諸氏族の親戚関係の上に立つ」(Ibid., 邦訳144ページ)のである。なお、半族(英語名 moiety) ^{はんぞく}というのは、その社会に生まれ来る人々や子孫を2つのグループに分類したその一つのグループのことである。別の半族から婚姻相手を選び、狭い範囲内での近親結婚を避けるための工夫であると見られる。同様の氏族—胞族—部族という組織形態が、アメリカ原住民の組織に見られることはイロコイ族に関する研究に詳述⁽¹⁰⁾されている。

本論に立ち戻ることにして。モースは、「全体的給付体系」の上部組織である部族と、その部族内あるいは部族間で行われるポトラッチと呼ばれる制度ないし習俗について以下のように説明する。「アメリカ北西部のこれら2つの部族[トリンギト族とハイダ族——引用者]とこれらの全地域において、

(10) イロコイ (Iroquois) 族とは、アメリカ合衆国ニューヨーク付近の森林地帯に住んでいたアメリカ原住民の総称である。モルガンはイロコイ族について次のように説明する。「氏族は原始的な形態で見出され、またその理論的な組織および実際の機能がギリシャ人およびローマ民族の氏族を十分理解するためには、アメリカ・インディアン氏族の成員の機能・権利・特権および義務についての知識が絶対に必要である」(Morgan [1877] 邦訳100ページ)。モルガン著『古代社会』(Ancient Society) は、イロコイ族について3つの章を割り当てているが、その理由は引用したとおりである。なお同書には、氏族—胞族—部族というイロコイ族とはほぼ同様の組織形態が古代ギリシャ世界に見られることが明らかにされている。

全体的給付は典型的な形態であるが、発展し比較的稀な形態をとっている。アメリカの学者たちが用いているように、われわれもこれを「ポトラッチ」(potlatch)と呼んだ。……「ポトラッチ」は本来「食物を与える」、「消費する」という意味である。これらの部族はきわめて富裕であり、島々、沿岸とロッキー山脈の間に居住し、絶え間なく祝祭を行い冬を過ごす。その祝祭の中で、饗宴、定期市、取引が行われる。それらは同時に部族の厳粛な集会の場である。そこでは、部族は階層集団や秘密結社——これらはしばしば階層集団やクランと混ざっている——によって分けられる。また、クラン、婚姻、入会式 (initiation)、シャーマニズムの集會、さらには主要な神々、トーテム、クランの集団的あるいは個別的先祖などを祀る集會すべてが、人間社会、部族、部族連合あるいは部族間における儀礼や法的、経済的給付、政治的地位の決定などと混淆し錯綜した網を構成している」(Mauss [1925] 邦訳18-19ページ)。「しかしこれらの部族において注目すべき点は、これらの全活動を支配している競争と敵対の原理である。一方では、ついに戦闘になり、相手の首長や貴族を死に至らしめるようなこともある。他方では、協力者であると同時に競争相手でもある首長（普通は祖父、義父、婿）を圧倒するために、蓄えた富を惜しみなく破壊してしまうこともある。クラン全体が首長を媒介として、クラン全員のために、所有するすべてや行う一切のものを含む契約を締結するという意味で、そこには全体的給付が存在する。しかしこの給付は首長にとってはきわめて競争的な性格を帯びたものである。それは、本質的に高利を取るもので、浪費を余儀なくさせるものであり、何よりも将来自分たちのクランが利する階層を確保するための貴族同士の戦いなのである。われわれは、こういう制度に「ポトラッチ」という名称を与えることを提案したい」(Ibid., 邦訳18-19ページ)。少し長くなったが、これがモースの(11)というポトラッチの概要である。

以上から明らかなように、モースの『贈与論』は、これまでほとんど研究

原始貨幣と貨幣の起源

の対象とはならなかった北米の原住民、あるいは海洋民族であるポリネシア人やメラネシア人などの儀礼的な贈与システムの解明を目的としている。極論すれば、こうした社会では、人々は互いに贈与し、授贈することのために毎日を生きていくと言っても決して過言ではないのである。その中で有名なのは、北西アメリカの原住民のポトラッチである。主人は気前よさを見せつけようと客に莫大な富や食物を与え、ついには貴重品を破壊して見せるのである。このような贈与の習慣は、経済的な価値を持つのみならず、政治的影響力の源泉であり、宗教的儀式であり、倫理的義務の履行といった経済・政治・社会生活のほとんどすべてに関わっている。モースはそれゆえ、こうした贈与システムを「全体的社会的体系」と呼び、彼らの社会を理解するためには決定的に重要であるとみなす。そして、この贈与システムは「与える義務」、「受け取る義務」、「返礼の義務」という3つの義務の複合から成り立っていると考える。⁽¹²⁾

(11) 先の注8で引用したベンヴェニストは、ポトラッチについて次のような興味深いことを述べている。「民族誌学の分野では、ある祝祭を選んで富の誇示や破壊を行うことを〈ポトラッチ〉と呼んでいるが、これまで縷々みてきた *daps* (《豪華な祝宴》という意味——引用者) とは実にそのインド＝ヨーロッパにおける社会的表出と言えるだろう。ポトラッチでは [一般に長や権力者が] 自らの財産を消費し、そんなものは大したことはないとの風を装う。そして、蓄積した富をたちどころに蕩尽して、対抗者の鼻を折ろうとする。もしこの際限のない散財ゲームで対抗者に打ち勝てれば、彼は自らの地位を獲得かつ維持できる。ポトラッチは他者にさらなる散財を求める挑発であり、競合者は仕掛けてきた者を上回る散財を行う。まさにそこからかつてマルセル・モースがいみじくも示したように、一方の名誉と他方の楽しみのために蓄積され、散財される富の循環が始まるのだ」(Benveniste [1969] 邦訳71ページ)。

(12) モースは贈与システムにおける「与える義務」、「受け取る義務」、「返礼の義務」という3つの義務の他に、第4の義務として「供犠」を重視する。モースおよびユベール (Henri Hubert) は供犠について次のように論じる。「供犠は贖いの儀式である。というのは、供犠の祭主は聖化され、神の力の支配化に入り、自分の代わりに、犠牲を捧げることによって自らを贖うからである」(モース/ユベール1908 (1899) 邦訳103ページ)。「供犠は呪術的儀式や同時に恩寵、誓願、神の憐みを乞うことの3つに役立つ祈禱と同じく、同時に非常に多様な機能を果たすことができ

ここで問題となるのは、こうした社会に住む人々が何のために贈与に駆り立てられるのか、これらの義務が一体何に由来するのかという最も単純で、しかし根本的なことである。彼らの社会では、贈与には返礼や支払いの法的義務がないからこそ贈与なのである。それにもかかわらず、人々は贈与を受けると返礼の義務があるように感じるのである。それなら、すぐに返礼の義務を履行すればよいと思うのが普通であるが、実際はそうではない。贈り物を貰って即座にお返しをすとかえって相手を傷つけ怒らせるというのである。非常に不可解な話ではある。モースはこの話の落としどころを、マオリ族——現在のニュージーランドにイギリス人が入植する前から住んでいたポリネシア系の先住民——の考えに依拠するのである。すなわちマオリ族によれば、贈与された物には精霊が宿っており、受け取った物には返礼を強いられるという。

モースはマオリ族の贈与システムについて、タオンガ (taonga とハウ (hau) という2つの言葉を基軸に周到な説明を行っている。まず前者について次のように言う。「タオンガは、マオリ族の法や宗教の考え方では、人、クラン、土地に強く結びついている。それは、マナ、つまり呪術的、宗教的、霊的な力を媒介する [ある特定の] 品物である。……幸いにも採集された諺によると、タオンガは、それを受けた人を殺すように祈られる。したがって、法、とりわけ返礼をする義務が守られない時には、タオンガはそのような恐ろしい力を内蔵しているとされる」(Ibid., 邦訳33ページ。後者のハウについては、「物の霊とくに森の霊や森の獲物の霊である」(Ibid., 邦訳34ページ)と述べ、こう説明する。「受け取られ、交換される贈り物が人を義務づける

る。……この [供犠の] 手続きは、犠牲という媒介によって、つまり、儀式の中で破壊される事物の媒介によって、聖なる世界と世俗の世界の間の伝達を確立することにある」(同104ページ)。これが神への贈与である供犠の本質であるというのである。

原始貨幣と貨幣の起源

のは、貰った物は生命のない物ではないということに由来する。贈り物をした人がそれを手放した後でも、それは彼の一部になっている。その物を持っていた時に、それを盗んだ者に対して影響力を持つと同じように、その物を通じ、贈り物を受領した者に対して影響力を持つのである。というのは、タオンガはその森、郷土、土地のハウ（霊）によって生命を吹き込まれているからである。それはまさに、「土着の」ものである。ハウは常に所有者を追い求めるのである」（*Ibid.*, 邦訳35-36, 傍点は引用者）。ごく簡単に言えば、モース『贈与論』のキー概念となるのは、贈与のサイクルを持続させるハウという“精霊”なのである。

上に述べたように、『贈与論』では「全体的給付体系」およびポトラッチという制度・習俗の重要性が強調されてきた。モースは「交換される贈与と返礼の義務」と題する『贈与論』第1章で、ポリネシア〔太平洋にあつて、おおむねハワイ、イースター島、ニュージーランドを頂点とする三角形（ポリネシアン・トライアングル）に含まれる島々——引用者〕のうち、サモアとマオリを取り上げて次のように述べている。まずサモアについてこう説明する。「第1に、サモア島における契約的贈与体系は婚姻の時以外にも広がっている。それは、子供の出生、割礼、病氣、娘の初潮、葬式、商取引に伴って現れる。第2に、いわゆるポトラッチの2つの本質的要素が確認されている。一つは、富が与える名誉や威信や「mana」（すなわち呪術的、宗教的、霊的な力を媒介するもの）であり、もう一つは贈与のお返しをすべきであるという要素である。返礼をしないと、このmana、権威、お守り、そして権威そのものである富の源泉などを失う恐れがある」（*Ibid.*, 邦訳30-31ページ）。

『贈与論』には、上に述べたポトラッチやタオンガ、ハウという聞きなれない言葉の他にも、クラ、mana、ヴァイグアという用語が頻出する。これらについての知識は、ポリネシアン・トライアングルを構成する島々の原住民の風俗や慣習などを理解するうえで不可欠であると言っても差し支えない。

そのため以下では、クラ、マナ、ヴァイグアについてなるべく簡単に説明しよう。

モースは、「クラ (kura) は一種の壮大なポトラッチである。それはトロブリアンド諸島全域……に拡がり、部族間の巨大な交易を促している」(Maus [1968] 邦訳72-73ページ) と述べ、次のような説明を加える。「クラは日常の単純な経済的交換であるギムワリ (gimwali) と厳しく区別されている。ギムワリは、他の部族にまたがるクラの集会を構成する盛大な原始的市いちにおいても、あるいは部族内のクラの小さい市いちにおいてもクラと同様に行われる。しかしギムワリは、交換を行う双方が激しく執拗に値切りあう点で、クラにはふさわしくない方法をとる。クラに必要な鷹揚な態度で振舞わない者は「まるでギムワリをやっているようだ」と非難される。少なくとも外から見ると、アメリカ北西部のポトラッチと同じように、贈り物を与えることと貰うことから成っており、今日の受贈者は、明日の贈与者となる」(Ibid., 邦訳73-74ページ⁽¹³⁾)。

次に、マナについて説明しよう。モースは『呪術論』において以下のように述べている。「われわれが特別に考察する2つの民族集団の呪術において、明らかにそれが機能しているという事実からも、逆にわれわれの分析の根拠の正しさが実証される。その概念とは、メラネシアにおいてマナの名で述べられるのが見出されたものである。……マナの語はいわゆるメラネシア語のすべてと、大部分のポリネシア語とに共通している。マナは、単に一つの力、存在であるのみならず、一つの作用、資質および状態である。換言すれば、この語は、名詞であると同時に形容詞、動詞でもある。人々は、ある対象がマナの資質を有するという代わりに、それはマナであると述べるのであり、この場合、マナは一種の形容詞である (人間についてはそうは言えない)。

(13) クラについては Leach, J. W. and Leach, Edmund [1983] に詳しい。

原始貨幣と貨幣の起源

ある存在、精霊、人間、石、儀礼については、それがマナを持っているとか、「あれこれのことをなすマナを持っている」とか言う。マナという語は、いろいろな語尾変化形で用いられ、マナを持つとか、マナを与える……などを意味したりする。要するにこの語は、われわれが妖術使いの力、ある事物の呪術的資質、呪術的事物、呪術的存在、呪力を持つ、まじないをかけられる、呪術的に作用する、といったような言葉でもって示している雑多な観念を包摂しているのである。つまり、われわれがその親縁性に気付きながらも、ばらばらに示してきた一連の概念が、単一の語に集約して提示されているわけである」(Ibid., 邦訳168-169ページ)。モースはマナについてさらにこう説明する。「マナとは、まさしく事物と人間の価値、すなわち呪術的価値、宗教的価値、そして社会的価値さえも作り上げているものである。個人の社会的地位は、彼らのマナの重要性に正比例するが、とりわけ、秘密結社における地位がそうである。所有についての諸々のタブーの重要性や不可侵性は、このタブーを課する個人のマナに依存する。富はマナの結果だと考えられ、いくつかの島では、マナという言葉は、金銭を意味してさえている」(Ibid., 邦訳168-169ページ)。以上の説明だけではマナの概念を把握するのに充分ではないし、それが雑多な観念を包摂していることも確かであるが、マナが遍在する超自然的・神秘的・呪術的な力の源泉であり、簡単に言えば一種の“精霊”であると考えられる。

モースは、贈与システムにおけるヴァイグアについて、その重要性を強調する。彼はヴァイグアというのは、贈与において一種の貨幣の役割を果たすものとして、こう述べている。「交換＝贈与における本質的な対象は、ある種の貨幣であるヴァイグア (vaygúa) である。これには2種類ある。一つはムワリ (mwali) といわれる美しい腕輪であり、これは貝殻を彫刻し、磨き上げたもので所有者か、その親類が特別の機会に付けるものである。もう一つはソウラヴァ (soulava) といわれる首飾りであり、これはシナケタ地方

の熟練した職人が赤い二枚貝の美しい貝殻から作ったものである。これを女性は誇らしげに身に付ける。稀には、男性が重病に苦しむ時にこれを付けることもある。しかし通常、人々は腕輪と首飾りを両方とも大切に保管している。それらを所有していることが何よりの喜びなのである」(Mauss [1925] 邦訳75ページ、傍点は引用者⁽¹⁴⁾)。ヴァイグアは貨幣なのか否か、貨幣の定義をめぐる問題は、次節以降でも取り上げるように、モース、マリノフスキー、ポラニーにとってきわめて重要で切実な問題なのである。

ところで、モースはアメリカ北西部のインディアンの典型的な例を挙げて、彼らには2つの観念が明白に現れているという。一つは「信用と期限」の観念であり、他の一つは「名誉」という観念である。この場合、贈与という慣行は信用を生み出すという。「贈与は必然的に信用の観念をもたらす。発展が経済上の法を、物々交換から販売へ、現金販売から信用販売へと移したのではない。一定期間の中で与え、返却される体系の上に、一方で物々交換が生まれた。これは以前には別々になっていた2つの時期を隣接させ、単純化する過程で作られたものである。他方、売買そのものも同じように生まれた。売る時は期限をつけ、あるいは現金で購入し、また貸し付けを行った。というのは、われわれが叙述している（特にバビロニア法の）段階を超えた法体系のいずれにおいても、今日われわれの周囲に残存しているすべてのあらゆる古代社会に知られている信用に関する観念が欠けていたことをわれわれは証明することができないからである」(Ibid., 邦訳99ページ)。すなわち、贈与はヴァイグアというある種の貨幣と、「貸し付け」という形の信用を生み出したというのである。

(14) ここでシナケタ地方とあるのは、トロブリアンド諸島の2大集落の一つであり、他のヴァクタの集落とともにクラにおいて主要な役割を果たし、赤い二枚貝の貝殻より成る首飾りが作られるのはトロブリアンド諸島全域の中でシナケタとヴァクタの集落だけであるとされる。

原始貨幣と貨幣の起源

上に触れたインディアンの取引では、「名誉」という観念が果たす役割も重要である。「首長個人の威信やそのクランの威信が、債権者が債務者になるような形で、消費したものや受け取った贈り物よりも多くの物をお返しするという義務に、これほど密接に結びついている例は他に見られない」(Ibid.)。「誰が一番裕福で、最も多く消費するかを競うのである。対抗と競争の原理があらゆるものの根底に潜んでいる」(Ibid., 99-100ページ)。このように、名誉の観念がアメリカ北西部のインディアンはもちろん、ポリネシアやメラネシアにも存在するというのである。

不十分ではあるが、マルセル・モースの『贈与論』を中心に、その基軸となる「全体的給付体系」をさまざまな観点から検討し、あわせて贈与という非経済的取引が交換取引を生み出す端緒となったとするユニークな主張や、原始貨幣を含む貨幣の発展段階を示したモースの見解について考察した。彼はまた、贈与には受け取るだけでなく、返礼の義務があり、このような義務的贈与制度が交換の原初的形態であるとみなすのである。モースによれば、部族内あるいは部族間の贈与やその返礼の対象として、ヴァイグアと呼ばれる腕輪や首飾り、ある特定の銅板、ある種の貝殻を数珠状につないだワンパムなどが富の標章であり、同時にそれが原始貨幣なのである。『贈与論』は、ポトラッチ、クラなどの交換体系の分析によって、宗教、道徳、法、経済の諸領域に還元できない「全体的給付体系」という独創的な概念を打ち出し、以下に述べるマリノフスキーやボラニーにも大きな影響を与えている。

IV マリノフスキーの貨幣起源説

ブロニスワフ・マリノフスキー (Bronislaw Malinowski: 1884-1942) は、文化人類学という新しい分野を切り開いた研究者としてよく知られている。とりわけ、マリノフスキーと言えばトロブリアンド諸島を思い起こすほど、彼のトロブリアンド諸島におけるフィールドワークは有名である。このフィー

ルドワークの成果は、彼の代表的著作 *Algonauts of the Western Pacific* (邦訳『西太平洋の遠洋航海者』)として公刊されている。これは、その副題にあるように、「メラネシアのニュー・ギニア諸島における、住民たちの事業と冒険の報告」である。この著作の「序論」において、マリノフスキーは研究の主題・方法・範囲について興味深い指摘を随所に行っているのです、そのいくつかを紹介しよう。

マリノフスキーは次のように述べている。「民族学者は、網を正しい場所に張って、そこにかかる獲物を待つだけではいけない。彼は活動的な狩人として、獲物を網に追い込んだり、最も近づき難い巣まで追跡しなければならない。そうすることによって民族誌的な証拠を追求する、より積極性に富んだ方法へと道が開かれるのである」(Malinowski [1922] 邦訳42ページ)。「私は、調査地にいる間と、調査と調査との間の時期に、少なくとも6回は、クラ制度の概観を書き上げた。しかし、そのたびに、新たな問題と困難が出てくるのであった」(*Ibid.*, 49-50ページ)。「毎日、村を歩き続けている間、いくつかの小さな出来事、食事の取り方、会話、仕事の仕方などの特徴ある形式が繰り返し目に映ったならば、すぐにそれを書きとめるべきである。ある地区で調査をするとき、印象を書き集め整理するというこの仕事を、早いうちに始めるべきである。なぜかという、ある種の微妙な特色ある出来事も、新鮮なうちは印象深いけれども、慣れてしまうと気づかなくなってしまうからである」(*Ibid.*, 59-60ページ)。「この遠い国の習慣を読んでいるうちに、おそらく、これらの住民たちの野心と努力に対するある連帯感が、読者の胸中に生まれるかもしれない。おそらくかつてたどったことのない道に沿って、人間の心が明らかにになり、近づいてくるだろう。われわれとは遠く離れ、不思議な姿をとって現れた人間性を理解することによって、おそらく、われわれ自身の上に若干の照明が当てられるだろう。こうして、また、それだからこそ、これら住民たちと、その制度と、習慣とを理解したかいたった。

われわれはクラからある利益を得たと感じる根拠ができたと言えるだろう」(Ibid., 66ページ)。

マリノフスキーといえばトロブリアンド諸島を思い起こすと述べたが、トロブリアンド諸島といえば「クラ」を想起するといっても間違いなだろう。マリノフスキーとトロブリアンド諸島とクラ制度とは三位一体化しているのである。前節で述べたように、モースは『贈与論』においてクラについての詳しい説明をしているが、その際に次のように述べている。「われわれの歴史、法、経済に関する知識の中で、マリノフスキー氏がトロブリアンド諸島で発見した贈与・交換の習慣に関する記述ほど明瞭で完全なものはないだろう。しかも贈与が意図的に行われ、観察者によって理解されたものを他に見出すことはまず困難だろう」(Mauss [1925] 邦訳82ページ)。

『西太平洋の遠洋航海者』は序論を除いて12章から構成されている。そのうちの4つの章のタイトルにクラという文字が含まれている。実に全体の3分の1を占めるのである。マリノフスキーがクラ制度をどれほど重視したかが分かるだろう。ただ、クラ制度については前節でモースの概括的な説明を紹介したので、なるべく重複を避けてマリノフスキー自身の見解を検討することにしたい。

マリノフスキーは、トロブリアンド諸島におけるクラ制度について、次のように語っている。「クラとは、部族間で広範に行われる交換の一形式である。それは閉じた環をなす島々の大きな圏内に住む、多くの共同体の間で行われる。この環は……ニュー・ギニア東端の北および東にある多数の島を結ぶ線によって表される。このルートに沿って2種類の、また2種類に限る品物が、常に時計の針の逆方向に回っている」(Malinowski [1922] 邦訳121ページ)。ここで、2種類の品物とは、前節でモースが指摘したソウラヴァ(soulava)と呼ばれる赤色の貝の首飾りであり、もう一つは、ムワリ(mwali)という白い貝の腕輪である。これら2種類の品物は閉じた環の中を

動いていく間に、種類の異なるいろいろな品物と出会い、それらと交換される。こうしたクラにおける品物の移動、取引の細部は、すべて一定の伝統的な規則と慣習によって決められ、規制されており、またクラの行事のいくつかは、念の入った呪術儀礼と公式の儀式を伴うとされている (*Ibid.*, 傍点は引用者)。「一つの取引でクラ関係が終結することはない。だから、一度クラに入れば、ずっとクラに属するのが原則であって、2人の間の相互関係は、終生続く永続的なものである。また、任意のムワリヤソウラヴァはいつも旅を続け、所有者を変えるのであって、それが1ヵ所に落ち着くこともない。だから、「一度クラに入れば、ずっとクラに属する」という原則は、財貨自体にも当てはまるのである (*Ibid.*, 邦訳123ページ)。

クラの特色について、マリノフスキーはもう一つの重要な点について次のように指摘している。「クラは不安定な、内密の交換形式ではない。まったく逆で、神話に根差し、伝統的な法に伴い、公的な性格を持ち、一定の規則によって行われる。それは偶発的に行われるのではなく、前もって決められた日に、規則的に行われ、決められた約束の場所に向かう一定の交易ルートに沿って行われる。社会学的に見れば、言語、文化、そしておそらく人種さえも違う部族の間で取引されるのではあるけれども、クラは一定の不変の状況を踏まえて、何千という人々を2人ずつ組ませ、共同関係にまとめ上げることを根本として行われる」 (*Ibid.*, 邦訳127ページ)。さらに、マリノフスキーはクラ交換の次のような点にも注目する。「腕輪と首飾りという2種のヴァイグアを交換するのがクラの主な行為である。そういう機会が訪れて右から左へ勝手になされるのではない。実際には厳しい制限と規則に従うのである。この規制の一つは、交換の社会学と関係があり、クラの取引が、決まった相手とだけで行われることを定めている。クラに参加する一人の男——この地区の誰もがクラをやれるわけではない——は、わずかの人々とそれができる」 (*Ibid.*, 邦訳133ページ)。「クラの行事のいくつかは、念の入った呪術儀礼と

原始貨幣と貨幣の起源

公式な儀式を伴う」とあるが、呪術とクラとは不即不離の関係にあることは確かである。マリノフスキーは両者の関係についてこう述べている。「クラは、ある程度まで珍しい型の民族学的事実であるように思われる。その珍しい点とは、一つには、クラの社会学的、地理的な範囲の広さにある。諸部族間の大きな関係があって、広大な地域と多くの人々を、はっきりとした社会的なきずなで結び合わせ、義理のやり取りでしっかりとつなぎとめて、こまごました規則やしきたりを、調和のとれたやり方で守らせる——クラは、それを行う人たちの文化的水準の程度を考えれば、驚くほどの規模と複雑さを持った社会学的機構だと言える」(Ibid., 邦訳404-405ページ)。以上のように、マリノフスキーは実地調査を通じて知ったクラ交換の実態について詳細に報告するのである。

ポラニーは、互酬性 (reciprocity) についてマリノフスキーの名をあげて次のように述べている。「最もよく確証された互酬システムは、トロブリアンド諸島に関してマリノフスキーにより記述された。……トロブリアンド諸島では、生活上の農作物資の生産が互酬的関係を基礎とするばかりでなく、海岸の村と内陸の村との間に設けられた「魚とヤマイモ」もまた、互酬的基礎によって行われる。魚はある時期に現れ、ヤマイモは別の時期に現れる。この場合、交換の仲間たちは親類集団でなく村人全体である。トロブリアンド諸島には、このタイプの断然優れた制度として、クラ交易がある。交換に際しての共同はここでも存在するが、交換行為は接合されていない。贈物と返礼の贈物は時を異にして起こる。それは等価性の概念すべてを禁じる方法として儀礼化されているのである」(Polanyi [1977] 邦訳94ページ、傍点は引用者)。トロブリアンド諸島におけるクラ交易は、贈物と返礼による互酬システムを基礎とするものであり、儀礼化されているというのである。

クラとは何かについていくつかの観点から述べてきたが、クラと呪術（あるいは信仰）の間に密接な関係があることもよく知られている。マリノフス

キーは次のように説明する。「クラのさまざまな慣習と慣行を扱いながら、私はいたるところで呪術の儀式と呪文の分析に立ち入らねばならなかった。これは、何よりもまず必要なことだった。要するに現地のクラ観においては、呪術の占める位置が最高に大きいのである。さらにあらゆる呪術の呪文形式は、住民たちの信仰の本質を明らかにし、その典型的な考え方を徹底的にまた有効に解明してくれるので、住民の心の内面を理解するには、それを調べてみるのが最良の道なのである」(Malinowski [1922] 邦訳343ページ)。「これまでに集めたすべての資料は、クラにおける呪術の非常な重要性を明らかにしている。しかし、住民たちの部族生活の他のどの面を取り上げてみても、根本的な重要性を持つ問題に取り組むときには、彼らは必ず、呪術に助けを借りているのである。彼らの考えに従えば、呪術が人間の運命を統率する、といっても誇張ではないだろうし、呪術は人に自然力を支配する力を与えるものであり、四方から人間に襲いかかって来る多くの危険に対する武器と甲冑なのだ、といっても言い過ぎではないだろう」(Ibid., 邦訳344ページ)。呪術は、トロブリアンドの島民にとっては武器と甲冑であるというのである。

フレイザー (J. G. Frazer) は、以上のようなマリノフスキーの見解を支持する。彼は、『西太平洋の遠洋航海者』の序文において次のように言っている。「トロブリアンド島民の生活とももの考え方に、呪術がこの上なく大きい影響を与えている事実は、おそらくマリノフスキー博士の著書を読む人の心に、最も強く消し難い印象を与える要点だと思う」(Ibid., 邦訳23ページ)。このフレイザーの見方は、トロブリアンド諸島の住民に与えた呪術の影響力の大きさを裏書きしている⁽¹⁵⁾のである。

(15) フレイザーは、*The Golden Bough* (『金枝篇』)において、原始的宗教、儀礼、祈禱、供儀、神話、習慣などについて興味深い分析を行っている。とくに『金枝篇』(一)の「呪術と宗教」と題する第4章では、文字どおり、呪術と宗教の類似性はもちろん、呪術と科学との類似性が強調されている。フレイザーは次のように言う。「呪術的世界観と科学的世界観の類似は緊密なものである。この2つのものにおい

原始貨幣と貨幣の起源

以上、マリノフスキーに即してクラ交換のいくつかの基本的な特色を指摘した。トロブリアンド諸島の住民でなければ分からない儀式や慣習について、非常に明解に、しかも断定的な口調で説明した研究者はマリノフスキーにおいて他にはいない。やはり、長期にわたってトロブリアンド諸島における住民との交流によるフィールドワークの体験が、追隨を許さぬ大きな成果となったことは否めない事実のように思われる。現地の住民との密接な交流がなければ、住民の心理状態にまで踏み込んで理解することは到底できそうにない。彼は言っている。「クラのさまざまな慣習と慣行を扱いながら、私はいたるところで呪術の儀式と呪文の分析の記述に立ち入らねばならなかった。これは何よりもまず必要なことだった。要するに現地のクラ観においては、呪術の占める位置が最高に大きいのである。さらにあらゆる呪術の呪文形式は、住民たちの信仰の本質を明らかにし、その典型的な考え方を徹底的にまた有効に解明してくれるので、住民の心の内面を理解するには、それを調べてみるのが最良の道なのである」(Malinowski [1922] 邦訳343ページ)。

マリノフスキーは、『西太平洋の遠洋航海者』の「クラの意味」と題する最終章で、クラについてこう述べている。「現地住民に関する研究で、本当に私の関心を引くものは、彼らの事物に対する見方、世界観、住民たちが呼吸してそれによって生きている生活と現実の息吹である。あらゆる人間の文化は、その文化をつくる者たちに、一定の世界像を与え、はっきりとした人

ては、現象の因果継起は普遍の法則によって決定され、その法則の効果が正確に予断され計算され得るがゆえに、完全に合理的であるとともに確実であると考えられている。気まぐれ、偶然、僥倖などの要素は自然の運行のうちには存在しない。この2つのものは、事物の運行を知り、そして広大かつ錯雑した世界の機構を動かす秘密の源泉を探り当てた者に、可能性の一見無限な予想を約束する。呪術と科学とが、同じように人間の心情に強く訴えたのはこの理由による」(Frazer [1925] 邦訳127ページ)。また、こうも述べている。「人はその目的を達するために、祈禱と供儀とによって神々や霊の好意を懇願するかたわら、一方では、悪魔の助力なしに欲する結果をもたらすと信じる儀式と言語の形式により頼んだのである。つまり宗教儀礼と呪術儀礼とを同時に執り行ったのである」(Ibid., 邦訳133ページ)。

生の意味を示す。人間の歴史を訪ね、地球の表をさまよって歩いてみて、私の心を最も捉え、他文化に突き入り、違った型の人間の生を理解しようという気持ちにならせたのは、人生と世界をさまざまな角度から見る可能性だった」(Ibid., 邦訳417-418ページ)。マリノフスキーにとって、トロブリアンド諸島でのフィールドワークや生活体験は、「違った型の人間の生を理解しようという気持ちにならせ」、「人生と世界をさまざまな角度から見る可能性」を与えたのだった。その直接の契機となったのが、現地住民のクラ交換であったことは言うまでもない。

異文化との接触に際して何が大切かという点について、マリノフスキーは次のように述べている。「人々の中には、他文化に見られる、表面的には珍しい、一見不可解なすべてのものの内的意味や心理的现实をつかみとれない人がいる。そのような人たちには、民族学者の素質はない。本当に「人間の科学」に取り組める人かどうかという試金石は、一つの文化のすべての要素を吸収同化して、究極的な総括することに喜びを感じるかどうか、いやそれより以上に、さまざまな文化の多様さと独自さに愛情を感じるかどうかにある」(Ibid., 邦訳418ページ、傍点は引用者)。

マリノフスキーのトロブリアンド諸島での貴重な体験は、民族学者・人類学者としての彼の問題意識の明確化、新たな研究手法の確立、数多くの独創的な学問的成果を生み出すに際して大きな力となったことは確かであろう。彼は、『西太平洋の遠洋航海者』の最後の一文で次のように述懐している。「民族学の研究は、しばしば誤解されてきたが、それは、この学問に耽溺した連中が、骨董品を何となく追い求めたり、原始的で怪奇な形態の「野蛮な慣習や粗野な迷信」の中をあてどもなく彷徨してきたからだった。しかし、民族学研究は、科学的研究の中でも、最も深い意味において哲学的で、啓蒙的で、高度の学問の一分野になる可能性がある。だが、悲しいことに、民族学にとって、時間は限られている！いままで述べたようなこの学問の真の意

原始貨幣と貨幣の起源

味と重要性が、遅すぎないうちに、本当に分かってもらえるだろうか」(Ibid., 邦訳419-420ページ)。この記述には、マリノフスキーの民族学の現状についての悲観と、新しい民族学を確立しようという抱負と、そのための時間的制約を憂慮する気持ちが混在しているようである。マリノフスキー、38歳前後の錯綜する心の揺らめきも感じられる。だが、彼はその後も次々と意欲的な労作を公刊し、人類学、民族学の沃野を切り開いたのである。

マリノフスキーは、自己の体験を通じて、「真の学問的研究」の重要性と、そのあり方について研究者を引きつける次のような一文を残している。「遊離孤立した事実は、それ自体どのように目新しく印象的に見えても、学問にとっては、何の価値もない。真の学問的研究が、単なる骨董品集めと違うのは、後者が、風変わりで特異な事物だけを追い、センセーショナルなものを求め、普通の倍の刺激を与えるものを集めるのにきゅうきゅうとしている点にある。これに反して、学問は、事実を分析、分類する際にも、それを有機的な全体の中に位置づけ、現実の多様な諸面をいくつかの体系に類別しようと努力したうえで、その体系のどれかに事実を組み込むことを目標としているのである」(Ibid., 邦訳403-404ページ)。彼は、トロブリアント諸島などでのフィールドワークに基づいて、『西太平洋の遠洋航海者』に代表される多くの著書や論文を執筆している。そうした貴重な体験が彼の上述のような学問観を形成したのであろう。

ところで、モースとマリノフスキーは年齢も近く、研究領域も重なる分野が少なくないことから、互いに研究上のライバルを意識していたようであるが、表面上、彼らの見解がぶつかったことはただ一つの点を除いてはなかったように思われる。その点とは、貨幣の定義についての両者の見解の相違である。モースは、「貨幣という観念の使用原理に関する覚書」というタイトルの非常に長い注(Mauss [1925] 邦訳120ページ、注29)において、ヴァイグアが「貨幣」であるか否かについて自説を展開する。モースによれば、長

い間、模索を続けてきた人類の歴史は、3段階に区分される。第1の段階は、呪術的性格を帯びた一定の貴重品に購買力を付与したことに始まるもので、この時代に貨幣の最も古い起源を見出すことができる。第2段階は、人類がクラン間、部族内、部族間に品物を流通させることに成功し、買うための道具が富の循環に役立つことを見出した段階である。第3段階は、ある一定の貴重品を集団やクランから切り離し、それを普遍的に用いられる価値測定の永続的な道具とする方法を案出した段階である。結論から言えば、モースは、貨幣という用語を第2段階における「買うための道具」に限定する。これに対してマリノフスキーは、貨幣の用語をモースのいう第3段階、すなわち現代的な意味での使用に用いるのである。それゆえ、ヴァイグアを貨幣とみなすかどうかは、貨幣の役割をどう考えるのか、貨幣という用語にいかなる任意的な限定を与えるかに依拠すると考えられる。

一方、マリノフスキーは第3段階のものを貨幣とみなす。彼は交換手段、⁽¹⁶⁾ 価値尺度、価値貯蔵、繰り延べ支払いの標準 (standard of deferred payment)

(16) 「繰り延べ支払いの標準」というのは、通常、「支払い手段」と呼ばれるものである。ここで引用した記述には、交換手段と支払い手段とは異なった意味に用いられている。マリノフスキーのみならず、モースやボラニーでも同様である。彼らにおいて交換手段と支払い手段が異なるのは、財・サービスの購入と即時に貨幣の支払いがなされるのではなく、支払いが「繰り延べられる」からである。しかし現在では、交換手段と支払い手段とは同じ意味で用いられる場合が多いようである。やはり同じ意味で決済手段という場合もある。これら3つを同義であるとするかどうかは微妙な問題である。筆者は、資金の貸借によって生じる債権・債務関係が貨幣を用いて弁済（清算ないし解消）される場合はもちろん、財・サービスの購入によってなされる場合も債権・債務関係が生じ、それが貨幣を用いて決済される点では同じであると考えている。すなわち、財・サービスの売買取引においては、売り手は買い手に対して債権を持ち、逆に買い手は売り手に対して債務を負うが、そうして生じる債権・債務関係は貨幣との交換によって清算されるという点では基本的に変わらない。かつてホートレー (R. G. Hawtrey) は、「法的には、貨幣は債務の清算手段であり、この方が交換手段というよりもより一般的な概念である。財の購入が債務を生み出し、貨幣はその債務を清算する手段を提供するからこそ交換手段として用いられるのである。また支払いが現金でなされるときは、その債務が即座に清

原始貨幣と貨幣の起源

の4つの機能を果たすものが貨幣であり、この意味では明らかにトロブリアン諸島には貨幣は存在しないという。つまり、島民間で交換される物品の交換比率は慣行的に決まっていたので誰もが知っているのも、ある物が共通の交換手段や価値尺度として使用される必要は認められない。自由交換が存在して初めて共通の価値尺度が必要となるが、そのような状況にはないと結論づける。すなわち、トロブリアンド諸島ではヴァイグアの本質的役割は価値貯蔵手段であり、交換手段や価値尺度の機能は果たしていない。また、支払いを決して延ばされないで、繰り延べ支払いの標準の問題は起こり得ないという。彼の見解では、島民間の交換はその地域社会の中で皆がよく分かった慣習的な方法で行われる物々交換取引であり、しかも直接必要な物だけが交換され、その種類も限られ、取引慣習も長年変わっていない。それゆえ、多種類の品物が交換され、何らかの共通の尺度を必要とする自由交換の余地はないし、その必要もない。結論として、マリノフスキーはヴァイグアを貨幣とみなさないし、島民の間で貨幣を必要とする交換のメカニズムが示されなければ、表面上、貨幣類似物があるという資料があつたにしても、それはすべて価値がないと力説する。以上のように、マリノフスキーは貨幣の用語をモースの第3段階、すなわち現代的な意味での使用に限定する。

このような批判に対し、モースは、これは貨幣の狭い用語の使用法であり、提起された問題は貨幣という用語にどのような「任意の限定」を与えるべきかであると答え、マリノフスキーのいう条件が満たされなくとも、「先行的なある貨幣形態が存在していたと信じる」と述べるにとどまっている。あるいはモース自身、第2段階の「社会的、公的、固定的な意味合い」が第3段

算されることを意味するにすぎない。貨幣による財の購入は、つねに債務の創造と清算に分解される」と述べている。こうしてホートレーは、貨幣の果たす最も基本的な役割は、交換手段というよりも「債務の法的清算手段」(legal discharge of a debt)であると規定するのである。筆者は、このホートレーの考え方に全面的に賛成である。これについて詳しくは、古川 [2012] 第1章を参照されたい。

階への明確なつながりをもっているともみなしているとも考えられる。

これに対しマリノフスキーも部族社会がより高度の文化を持つ社会と商業的關係を持つ場合、貨幣が存在し得るとし、その一例としてアラブ人とヨーロッパ人との間の長期間にわたる交易が生み出したディワラ (diwarra) と呼ばれる貝貨が通例であると述べる。したがって、ヴァイグアも同様な条件が満たされるならば、貨幣でありうるというのがマリノフスキーの見解であると思われる。だが、トロブリアン諸島の島民間だけの物々交換取引から、自生的にヴァイグアが貨幣となる交換のメカニズムは生み出されないというのが彼の結論であると判断できる。⁽¹⁷⁾ 19~20世紀でも原始的生活を営んでいたとして人類学者に注目されてきたトロブリアン島民の経済生活の実態についてのモースとマリノフスキーの見解のいずれが正しいかの判断は難しい。けれども、1910年代に2年間も同諸島のフィールドワークに従事し、現地人と交流を共にして彼らの生活実態や行動を詳細に観察したマリノフスキーの方がより説得的であるように思われる。以上のモースとマリノフスキーの「貨幣」の定義をめぐる論争については、ポラニーの「貨幣観」を対象とする次節でもう一度取り上げることにする。

本節の最後に、マリノフスキーの考え方に対する疑問ないし問題点を指摘しておきたい。マリノフスキーは、民族誌学者が見失ってはならない最後の目標について次のように言う。「人々のものの考え方、および彼と生活との関係を把握し、彼の世界についての彼の見方を理解することである。われわれは人間を研究しなければならない。人間の最も本質的な関心、言い換えれば、人間をつかんでいるものを研究しなければならない。文化が異なるにしたがって、価値は少しずつ異なってくる。人々は異なった目標を追い、異なった衝動に従い、異なった形式の幸福に憧れる」(Malinowski [1922] 邦訳66

(17) 以上のマリノフスキーの貨幣観については、Malinowski [1922] 邦訳第12章(「クラの意味」)を参照されたい。

ページ)。

マリノフスキーほど徹底的な現地調査に基づいて数多くの著書・論文を執筆した研究者は多くない。とりわけ、トロブリアンド諸島におけるフィールドワークのノウハウの高さについては、誰もが認めるところであり、それによって島民の生活実態を詳細に記述した不朽の業績が生み出されたのである。ただし問題は、マリノフスキーが自らのトロブリアンドの島民に関する知識という特殊なものを根拠に、そうした特殊な知識が、民族学的観察の及んでいないすべての地域にも妥当すると受け取られる懸念がありはしないだろうか。もしそうであるなら、この小さい島を一般化する、すなわちトロブリアンド諸島での体験が他にも通じると考えるのはあまりにも短絡的であるように思われる。マリノフスキーと同様のことはモースにも言える。すでに述べたように、モースはポリネシアやメラネシアあるいはアメリカ原住民のポトラッチの慣行を取り上げたけれども、それをもって古代の人類の交換体系が贈与に基づいていると推測するのは、論理の飛躍であろう。こうしたマリノフスキーやモースに寄せる臆測が、筆者の誤解によるとすれば幸いである。

V ポラニーの貨幣と市場

マリノフスキーが文化人類学という新分野を切り開いた学者であるとすれば、カール・ポラニーは経済人類学という沃野を開拓した第一人者であることは誰もが認めるところである。ポラニー (Karl Polanyi: 1886-1964) はハンガリー生まれの経済学者であり、経済人類学の開拓者として知られているが、文化人類学や歴史学などにも通じ、その該博な知識を活用して幅広い分野にわたり数多くの業績を残している。この節ではポラニーの業績全般にわたって検討することは不可能であり、彼が大きな貢献をした経済人類学の分野、なかでもその中核を占められる貨幣および市場の問題、具体的には貨幣と市場の機能や目的などに焦点を絞って考察することにした。いう

までもなく、貨幣と市場とは密接に関連しているが、以下ではまず貨幣の機能ないし目的についてのポラニーの見解をフォローしよう。

先に検討したモースやマリノフスキーがそうであるように、ポラニーも貨幣の起源および貨幣の機能について非常に大きな関心を寄せていた。彼は貨幣の機能として、①交換手段、②支払い手段、③富の蓄蔵、④価値尺度（あるいは計算手段）があり、これらのいずれか一つについて妥当すれば、貨幣とみなされると考えるのである。これら貨幣の4つの機能は、それぞれ異なる機能を持っている。①交換手段としての貨幣は、財・サービスを入手するための間接交換を起源とする。売買がこれにあたる。②支払い手段としての機能は、債務の決済を起源とする。賠償、貢物、贈り物、宗教的犠牲、納税などがこれにあたる。③蓄蔵のための貨幣は、部分的には支払いの必要を起源とする。食料や家畜、身分を表す財宝などがこれにあたる。④価値尺度（計算手段）としての貨幣は、物々交換や財政管理を起源とする。歴史的には単位のみ貨幣も存在してきた。ポラニーは、4つの機能がすべて用いられるようになるのは、文字を持つ社会が発生して以降となると主張する（Polanyi [1977] 邦訳198-204ページ）。こうした貨幣の機能についてのポラニーの見解には、ことさら異を唱える必要はあるまい。だが、彼はこうした主張に次いで以下のような思い切った見方を提示する。「明瞭なことは、貨幣は主として交換手段であるとの見解は、貨幣の用法に関する初期の歴史を見ても、それを支持するような事実がまったくわずかしかないということである。この問題が単に定義上のことだけだと見るのも間違っているし、概念上の問題に過ぎないと見るのも間違っている。多様な貨幣的用法が相互に分離し独立した制度をなしてきたことを見れば、この問題のなかには、原初的社会的重要なメカニズムや構造を含む諸問題が提起されていること、またそれが交換手段以外の用法の分析のなかで明らかになるだろうことも分かるのである」（*Ibid.*, 邦訳199-200ページ）。そして次のように付け加える。「原始

原始貨幣と貨幣の起源

社会およびアルカイックな社会のデータが明らかにすることは、貨幣の交換手段としての用法が、他の貨幣用法を生じさせたとは言い切れないということである。逆に、支払い、蓄蔵、計算手段としての用法は、それぞれ独自の起源を持ち、相互に独立して制度化されたのであった」(Ibid., 邦訳206ページ)。このポラニーの見解によれば、交換手段としての貨幣の機能は中心的な役割を果たすのではなく、貨幣の4つの機能は、それぞれ独自の起源と分離・独立した機能を果たすというのである。

ポラニーは、貨幣について次のような概括的な見解を述べている。「市場組織に基づく現代の経済生活では、貨幣が交換のために使われている。そのため、われわれが貨幣というものをあまりにも狭く考えがちである。しかし、これが貨幣そのものであると言えるものは何もない反面、適当な領域から選ばれたものであれば、どんなものでも貨幣として機能するのである。実は、貨幣とは言語や文字や度量衡と同様な、一つのシンボル体系なのである。これらがそれぞれ異なるのは主として、使用される目的と、実際に使われる記号、そして、あるシンボル体系がどの程度一つの統一的な目的を明らかにしているか、という点においてなのである」(Polanyi [1957b] 邦訳59ページ、傍点は引用者)。このポラニーの見解は難しい。「貨幣とは、言語や文字や度量衡と同様な、一つのシンボル体系なのである」と言われると、異論のあるところである。

ポラニーは貨幣の起源、貨幣の機能と並んで貨幣の目的にも大きな関心を寄せている。彼はこう述べている。「初期的な社会には、「全目的」の貨幣はない。異なった貨幣の用法は、通常異なった象徴的な対象物のうえにあらわれる。だから、唯一の対象物が初期社会の貨幣の名に値するということはない。むしろ、貨幣という語は小さなグループに当てはまる。実際、われわれは「特定目的」の貨幣というものを知っている」(Ibid., 邦訳188ページ)。

そこでポラニーは貨幣が使用される目的に踏み込んで、その目的を2つに

分類する。それは、「多目的貨幣」と「特定目的貨幣」という分類である。ポラニーは「多目的貨幣と特定目的貨幣」という小見出しのもとに、こう述べている。「古代社会は「多目的」貨幣を知らなかった。そこでは、いろいろな貨幣機能に対して、それぞれ異なる材料の貨幣が使われるのであるから、すべての貨幣機能が従わなければならないような文法はない。どんな種類の文法をとっても、それだけが明確に貨幣と呼ばれるに値するということはない。むしろ貨幣という言葉は、それぞれが別々の方法で貨幣の役割を果たすことができるような、いくつかの素材の小さな集合全体に対して当てはまるものである。現代の社会では、交換手段として使用される貨幣がそのほかのすべての機能をも果たす力を持たされているのに対し、初期の社会では、むしろ逆の関係となっている」(Ibid., 邦訳63ページ)。「富を伴う威信を評価する場合、その他、額の大きいものを評価する場合には、たまたま奴隷や馬や家畜が標準として使用されたが、子安貝の貝殻はもっぱら少額の場合の尺度として使われた。……また本物の奴隷が外国の大王への貢物の支払い手段となり、子安貝は国内の支払い手段として機能し、さらには交換手段としても機能するという場合もあるだろう。その場合でも、貴金属が富の貯蔵のために用いられないということはない。しかし、それ以外の場合には、貴金属は貨幣として機能するのは、おそらく〔価値の〕標準としてか、輸入品との交換手段としてよりほかにはないであろう」(Ibid., 邦訳63ページ)。「市場習慣がかなり広範に行き渡っているところでは、貨幣が交換手段として用いられることもあり得ようが、この目的で使われるのは、その場合以外にはまったく貨幣として用いられない数種類の交易品であろう。このように、さまざま

(18) ポラニーは特定目的貨幣についてこんな例を挙げている。「ナチス・ドイツに始まる20世紀の第2・四半期以来、「現代」貨幣は不統一への回帰という傾向をはっきりと示し始めている。ヒトラー治下では、6種類の「マルク」が流通し、その一つ一つが特定の異なる目的に限定されたのである」(Polanyi [1957c] 邦訳88-89ページ)。

原始貨幣と貨幣の起源

な変型の組み合わせが無数に生じるのであって、貨幣の諸用法が種々様々な量化可能物〔貨幣の対象となるものが量的に計算可能であるという性質——引用者〕の間に割り振られるという、きわめて一般的な、しかしまたきわめて重要な規則を除いては、すべてに当てはまるような規則というのは一つとして存在しない」(Ibid., 傍点は原文ではイタリック)。

ポラニーは貨幣の特性について次のように指摘する。「初期的な社会〔原始的な社会およびアルカイックな社会〕には「全目的」の貨幣はない。異なった貨幣の用法は、通常異なった象徴的な対象物の上にあられる。だから、唯一の対象物が初期社会の貨幣の名に値するというのではない。むしろ、貨幣という語は、小さな小さなグループに当てはまることになる。実際、われわれは「特定目的」の貨幣というものを知っている。……現代社会では、交換手段として役立つ貨幣が原則として他の機能をも果たすことになる信じられているために、多様な貨幣使用の間の差異は大なり小なり学問上だけの問題であるけれども、初期的社会では事態は根本的に違うということがある。例えば、奴隷が価値尺度や計算手段として実質的富や大量の物をまとめて測るのに用いられる一方、子安貝が別個の状況で小額計算にのみ用いられているような例を見出すことができる」(Polanyi [1977] 邦訳18ページ)。

さらにポラニーによれば、このような価値の多様性から、時に異なった機能に異なった貨幣が使用されることになった。「古代貨幣は極端な場合には、支払い手段としては1つの種類の貨幣を、価値尺度としてはもう1つの貨幣を、価値の蓄蔵のためには第3の貨幣を、交換手段としては第4の貨幣を使用する」(Ibid., 邦訳64ページ)。例えば、古代バビロニアにおいては、「経済管理が複雑であり、実際上の操作が精緻であったにもかかわらず、貨幣組織に関しては、貨幣素材多様化の原則が強固に確立されていたという点で、典型的に「原始的」であった。……すなわち、賃貸料、賃金、租税は大麦で支払われたが、価値の標準としては銀が普遍的であった。全体の制度は、「銀

1 シェクル=大麦 1 グル」という等式に確固たる基礎をもつ会計原則によって統御されていた」(Ibid., 邦訳74ページ, 傍点は引用者)。さらにポラニーはこう付け加えている。「計算貨幣としての銀の機能, 支払い手段としての大麦の使用, 交換手段としての石油, 羊毛, ナツメヤシなどの多くの基本物資の同時使用に基づいて, 精緻な物々交換の制度が行われていた」(Ibid., 邦訳75ページ)。

上に触れたように, ポラニーは, 古代バビロニアの貨幣組織について, 「貨幣素材多様化の原則が強固に確立されていたという点で, 典型的に「原始的」であった」と指摘する。この点, ポラニーは原始貨幣それ自体をどのようなものとして把握していたのだろうか。彼は原始貨幣についてこう説明する。「近代社会では, さまざまな貨幣用途に見られる相違はほとんど歴史のあるいは理論的関心以上のものではなく, まれに実用的関心をもたれるに過ぎない。その理由は少なくとも最近まで, 近代貨幣が全目的貨幣であったことだ。すなわち交換手段がまた他の貨幣用途にも供された。その反対に原始貨幣は特定目的貨幣である。すなわち種々の対象が原則としてそれぞれ異なる貨幣用途を持っている。それゆえ, さまざまな貨幣用途は別々に, そしてたいていは互いに独立に制度化される。その結果, 量化可能物の貨幣用途の理解にとって, 実際にきわめて重要である」(Ibid., 邦訳557-558ページ, 傍点は引用者)。「原始貨幣の定義はその用途に由来する。貨幣用途とは, 支払い, 尺度標準, 蓄蔵, そして交換である。貨幣とは上記のうちのいずれかに使用された量化可能物として定義される」(Ibid., 邦訳558ページ)。こうしてポラニーは, 貨幣の4つの用途(機能)が互いに独立しているような貨幣, すなわち特定目的貨幣を原始貨幣と定義するのである。

ところで, 身分や性別によって特定の貨幣が用いられる場合がある。この点でよく知られているのはロッセル島 (Rossel Island) の事例である。クイギン (A. Hingston Quiggin) によれば, 「ニューギニアの南東およそ200マイ

原始貨幣と貨幣の起源

ルにあるロッセル島の貨幣は、特有の関心をそそられる。それは100平方マイルほどの小さい島であり、1000名ほどの人口があるが、多くの点で彼らのメラネシアの隣人とは異なっている。彼らは彼らが営む豚や内縁の妻、カヌーや妻の相互の売買の助けによる、彼ら独特の貨幣システムにおいてとりわけ異なっている」(Quiggin [1949] p. 183)。「2種類の貨幣、*ndap* と *nkō* がある。*ndap* 貨幣はただ一つの二枚貝の貝殻からできている。……すべての *ndap* 貨幣は人間がロッセル島に現れるまでは神によって創造されたと思われている」(Ibid., p.184)。「*nkō* 貨幣は粗削りで不規則な形状の円盤であり、おそらくは巨大な二枚貝の貝殻からできていて、穴をあけて10個ずつ糸を通して……。……*nkō* は女性用の貨幣、これに対して *ndap* は男性用の貨幣であるというフィクションがある。そして *nkō* は *ndap* が22の価値を持つのに比べて16の価値しか持っていない。しかし少数の些細な違いを除けば、両者は同じように用いられる。……出生、結婚および死亡の儀式はすべて *ndap* と *nkō* の支払いを必要とする。それらがなければどんな祝宴も完全ではなく、またそれらは罰金や賠償にとっても必要である。将来の花婿は花嫁の父親のために高い価値の *ndap* を持参するが、その交渉はさまざまな要求者が *ndap* 貨ですべて支払われるまでは完全ではない」(Ibid., pp. 185-186)。

アームストロングは、ロッセル島の貨幣システムについて次のように説明する。「これまで記述した社会組織の特徴のほとんどにおいて、重要な経済的要素は、貨幣の支払いの形態にある。おそらく貨幣の支払いは、結婚式、葬儀および多くの他の儀式的活動の最も重要な構成要素である」(Armstrong [1978] p. 59)。そう前置きしたうえで、アームストロングはロッセル島の貨幣についてこう説明する。「貨幣は2種類ある。*ndap* として知られる貨幣は、一個の二枚貝 (*Spondylus shell*) から成り立ち、研いで磨かれている。……*nkō* として知られる他の種類の貨幣は、大雑把な形状としては、10組の貝殻の円盤から成り立ち、穴をあけて糸で結ばれていて、おそらく巨大な二枚貝

(Giant Clam) からできているのだろう」(Ibid.)。「2種類の貨幣 *ndap* と *nkō* は、多少とも独立してはいるものの、類似したシステムである。*nkō* システムは、ある意味では *ndap* システムの不完全な複製とみなされる」(Ibid., p. 61) と述べた上で、次のように指摘する。「*nkō* は女性の特性があり、これとは対照的に *ndap* は本質的に男性の特性がある。私が推測し得る限り、このことは、そう望まれた場合に、*nkō* に糸を通すのは女性の義務であり、それを考慮して、男性によってそうすることが何ら禁止されているようには見えないのである」(Ibid., p. 69)。

ところで、「特定目的貨幣」という用語（ないし考え方）はポラニーの専売特許のように思われているが、実はそうではない。ホイット (Elizabeth E. Hoyt) はポラニーに先立って、「主としてある限定された目的のために用いられる“貨幣”」(Hoyt [1926] (邦訳106ページ, 傍点は引用者) としていくつかの事例を挙げている。ホイット女史のいう「ある限定された目的のために用いられる“貨幣”」とは、ポラニーのいう「特定目的貨幣」（ないし「限定目的貨幣」）に相当することは自明であろう。このホイット女史の挙げた「ある限定された目的のために用いられる“貨幣”」についての記述は3つの段落に分かれているが、その段落ごとに順に説明しよう。

最初にホイットは次のようないくつかのケースを指摘する。「バンクス島 (Banks Islands) のマット貨幣 (mat money) はどんな物でも購入することができるけれども、ほとんどの場合、スゲ・クラブ (Suge Clubs) の地位を購入するために用いられる。ソロモン群島 (Solomon Islands) やビスマルク諸島 (Bismarck Archipelago) では、貝殻貨幣 (shell money) は妻を購入するためにのみ用いられるが、戦時の同盟国の支払いや贖罪金のためにも用いられる。すなわち、その機能は経済的であると同様に社会的でもある。同時に、その所有はその共同体における所有者の威厳を与えるのである」(Ibid., 邦訳106ページ, 傍点は引用者)。⁽¹⁹⁾ここで言われているように、バンクス島やソロ

原始貨幣と貨幣の起源

モン群島、ビスマルク諸島といったオセアニアの島々では、「どんな物でも購入できる」という意味での一般的購買力を持つ貨幣が存在するが、それらの貨幣は、ある特定の限定された物を購入するためにのみ使用される場合もあるという。つまりポラニーの用語によれば、「多目的貨幣」であると同時に、「特定目的貨幣」でもあるというのである。

次に、ホイトはロッセル島のケースを挙げてこう述べている。「ロッセル島には、ケー (*nkō*) とダップ (*ndap*) という2種類の貨幣があり、そのうち後者は男性によってのみ使用されるが、ある種の物はその貨幣でしか購入できない。この貨幣のある特別な種類ないし単位では、妻、内縁の妻および豚を買うために用いられるものの、それが人から人に渡るときは、大きな尊敬の念をもって取り扱われ、へつらうような態度が必要とされる」(*Ibid.*)。このケースにおいても、「多目的貨幣」が「特定目的貨幣」となり得ることを示している。以上のホイトの記述を見ると、彼女はほとんど無名に近い研究者でありながら、経済人類学の泰斗カール・ポラニーに先立って彼の学問的な枠組みを開拓した先駆的な研究者であり、ポラニーの「特定目的貨幣」という概念に先鞭をつけた人物であることを窺い知ることができる。

上述の特定目的貨幣（ないし限定目的貨幣）は、J. Hicks, *Critical Essays in Monetary Theory* (江沢太一・鬼木 甫訳『貨幣理論』)における「部分貨幣」(partial money) に相当する。J. ヒックスは、上述の特定目的貨幣（ないし限定目的貨幣）に該当する概念として「部分貨幣」という概念を案出し、次

(19) 「スゲ・クラブ」というのは、バンクス島における一種の男の“秘密結社”(secret societies) であり、入会志願者は一定額の貝殻貨幣を生産することが期待される。さらにその社会で昇進するためには一定額の貨幣が必要であるとされる。アインチヒは、このスゲ・クラブについてこう説明している。「スゲ (The Suge) は貨幣を蓄積しないでそれを会員の間で分配する。“配当”にあずかる者は階層に応じている。スゲにおいて高い階層に昇進するために多額の貝殻貨幣を使った男はそうした入会時の寄贈から大きな分け前を受け取ったり、後に昇進 [という形で] 支払われる資格がある」(Einzig [1966] p. 54)。

のように述べている。「必要となるのは、古典的な3機能〔計算単位、支払い手段、価値の貯蔵手段——引用者〕をすべて保有する完全に発達した貨幣と、それらの機能のうちの1つ（あるいは2つ）を保有しているが、そのすべては保有していない部分貨幣を区別することである。部分貨幣という概念は、これまでは大部分、歴史的現象を説明するのによく用いられてきた。しかし私がここで考慮しようとして望んでいるのは、そのような方向においては無い。私は、この概念が貨幣理論のうち現在もまだ不明のままに残っている問題を探求するための分析用具としても有用であることを主張したいと思っている」(Hicks [1967] 邦訳3ページ⁽²⁰⁾)。

(20) 上に述べた古代バビロニアの研究とは独立に、古代社会における市場の有無および市場と商人の関係を論じた研究として、J. ヒックスの著書 *A Theory of Economic History* (『経済史の理論』) にも言及しておきたい。ヒックスは次のように述べている。「貨幣は、有史の大部分において鑄造貨幣、すなわち何らかの支配者の「肖像や銘」がその表面に刻まれた金属片を意味していた。したがって、貨幣は「国家」の創り出したものであるかのように思われてきた。また、全時代を通じて、「国家」体制と「貨幣」制度との間の関係が、きわめて緊密であったことは疑いのない事実である。それにもかかわらず、貨幣が「国家」の創出により始まったものでないことは明白である。貨幣は、鑄造貨幣が現れる以前にも存在していた。貨幣はその起源から言えば、「商人的経済」の創出物の一つであった。それは「商人的経済」が創出した最初のものであるにもかかわらず、後に諸政府（まったく非商業的な政府でさえも）がそれを継承するようになったのである」(Hicks [1969] 邦訳110ページ、傍点は引用者)。J. ヒックスはギリシャ都市国家制度の後に成立したローマ共和国の特徴について次のように論じている。「ローマ共和国は、その起源においては指令—慣習経済であった。しかし、ローマ人は指令と慣習との間の矛盾を解決するのに、早くから類まれな手腕を発揮していた。ローマ人はまったく他に例を見ないほどに、法治主義者であった。法治主義者であったために、財産や契約についての商人の考え方とまったく無縁ではない法律的思考をもっていた。彼らは立法家であり、自分たちが創り出した法の一部として、商人法を——最後のころに至って——加えることができたのである」(*Ibid.*, 邦訳118-119ページ)。さらにJ. ヒックスはこう指摘する。「貨幣と法（商人法）は、事実上「古代世界」の2つの大きな経済的遺産である。この2つは、現在まで続いている成果である。ローマ帝国は滅亡し、はるかに原始的な指令—慣習経済への退歩が（少なくとも西ヨーロッパの大部分にわたって）見られたけれども、貨幣や法は生き残り、縮小はしたものの存続し続けた。……このようにして、かつてローマ領であった国々（すべてでは

原始貨幣と貨幣の起源

ポラニーは、貨幣の機能について次のように述べている。「原始社会およびアルカイックな社会のデータが明らかにすることは、貨幣の交換手段としての用法が、他の貨幣用法を生じたとは言い切れないということである。逆に、支払い、蓄蔵、計算手段としての用法は、それぞれ独自の起源を持ち、相互に独立して制度化されたのであった」(Polanyi [1977] 邦訳206ページ)。交換手段としての貨幣の機能より派生的に他の機能が生まれたのではなく、4つの貨幣の機能が相互に独立して生じたというのである。筆者の知る限り、こうした見解はポラニーをもって嚆矢とするのではないと思われる。

さて、これまで論じてきたポラニーのいう「限定目的貨幣」(あるいは「特定目的貨幣」、さらにはヒックスの「部分貨幣」)をどのように評価すればよいのだろうか。結論から言えば、筆者はこうした考え方に反対である。その理由は、第Ⅱ節で紹介した福田徳三の貨幣観に織込められている。すでに記述したように、福田は貨幣の定義としてこう述べている。「貨幣の定義を下して見ますならば、貨幣とは、一定の経済範囲内において、時、所、人、市場、その他一切の具体的制限を被ることのない、一般的価値移転の用具であると致すのが、最も当を得ていると存じます」(福田 [1925] 551ページ。「今日においても貨幣の引き渡しは、決定的、最終的、無条件的であります。他の具体的な物の引き渡しでは、このごとく決定的、最終的、無条件的にはなり得ないのであります。でありますから、貨幣は決定的、最終的、無条件

ないが、その多くのもの)が、新しい都市国家局面——わたくしがこれまで古代都市国家と相似のものとして用いてきた中世の共和制都市国家局面——に移行したとき、それらの国々はこれらの遺産に恵まれていたので、2度と同じ過程を繰り返すことはなかった。……それらの国々は当初から貨幣を使用しており、改めてそれを発見する必要がなかったのである。それらの国々が商人法を必要とするようになったときも、商人法を自ら創り出すには及ばなかった。かつてのローマ帝国の威光を示していたローマ法は、依然として利用することができたのである」(*Ibid.*, 邦訳121ページ)。J. ヒックスは以上のように、ローマの商人たちが「古代世界」の2つの大きな経済的遺産である貨幣と法(商人法)を受け継ぎ、交換の領域を拡大し、ひいては市場経済の領域を拡大していったプロセスを巧みに描写しているのである。

的な債務決済の用具なりと申すべきであります」(同569ページ)。この福田徳三の貨幣の定義からすれば、「限定目的貨幣」、「特定目的貨幣」、「部分貨幣」というのは、その字句からして明らかに条件付きの貨幣である。貨幣とは、その素材の如何を問わず、またアルカイックな社会であれ、モダンな社会であれ、それを構成する社会の成員から無条件に受け入れられるという意味での「一般的受容性」(general acceptability)を有することが不可欠の要件である。こうした観点に立つと、「限定目的貨幣」、「特定目的貨幣」、「部分貨幣」という着想自体は新鮮で興味深いけれども、それらは一種の名辞矛盾であると言わざるを得ないのである。このことは、第I節で述べた「原始貨幣」にも妥当する。「原始貨幣」もまた貨幣の定義に反する、それゆえそれは貨幣ではないというのが筆者の考えである。そうであるとする、ポラニーのみならず、モースの貨幣の定義自体が改めて問われることになる(すでに述べたように、マリノフスキーはすべての貨幣の機能を果たすものだけを貨幣とみなしている点に留意されたい)。

次に、ポラニーの多彩で独創的なさまざまな見解のなかで、貨幣と密接に関係する市場(ないし市場制度)について検討することにしよう。もう一つのポラニーの見解についての問題は、彼の市場不在説(ないし市場社会の虚構性)に対する疑問である。近年の各種資料の発掘と解説およびそれらを背景とする研究成果の進展につれて、古代バビロニアを対象とするポラニーの主張は妥当しないという考え方が強まっている。すなわち、古代バビロニアで活躍した商人は、単なる物資の分配・交換に関与する受動的な存在ではなく、利潤動機に基づく積極的な仲買人の役割を果たしていたという見方が多くの研究者によって主張されるようになってきている。ポラニーが主として対象とした世界は、世界4大文明のなかで最も古いとされるメソポタミア文明である。この点では、モースやマリノフスキーの対象とする世界とは大幅に異なっている。そのメソポタミア文明を生み出した古代バビロニアの人々、と

原始貨幣と貨幣の起源

りわけ商人たちが利潤動機に支えられて、「市場」の発展をもたらしたと考えるのが自然であるように思われるのである。

ポラニーは、代表的著作『大転換』(*The Great Transformation*)において市場制度とか、市場における交換という最も基本的な経済活動について次のように述べている。「われわれの時代より前には、原理的にさえ、市場に統制された経済が存在したことは一度もなかった。19世紀にあれほど執拗に唱和されたアカデミックな呪文にもかかわらず、交換で得られる利益や利潤が人間の経済に重要な役割を果たしたことはこれ以前には一度もなかったのである。新石器時代からこのかた、市場という制度はかなりありふれた存在ではあったが、その役割は経済生活にとって付随的なものにとどまっていた」(Polanyi [1957a] 邦訳57-58ページ、傍点は引用者)。ここでポラニーのいう「19世紀にあれほど執拗に唱和されたアカデミックな呪文」というのは、アダム・スミスの『国富論』に描写された世界、すなわち社会的分業が、ある財・サービスと別の財・サービスとの間の交換を通じて市場の発展を促すというパラダイムにはかならない。彼は「市場によって完全に支配・統制される経済などというものは、われわれの時代以前にはどこにも存在しなかった」(*Ibid.*, 邦訳59ページ)と断じるのである。

結局、ポラニーは以下のような命題を導く。「大まかに言って、次の命題が成り立つ。すなわち、西ヨーロッパで封建制が終焉を迎えるまでの、既知の経済システムは、すべて互惠、再配分、家政、ないしは、この3つの原理の何らかの組み合わせに基づいて組織されていた。これらの原理は、とりわけ対称性、中心性、自給自足というパターンを利用する社会組織の助けを借りて制度化されていた。この枠組のなかで、財の秩序ある生産と分配が、行動の一般的原理に律せられた種々様々の個人的動機を通じて保証されたのである。これらの動機のなかでは、利得は重きをなしていなかった。慣習や法、呪術や宗教がともに作用して、経済システムにおける各自の働きを究極的に

は保証する行動法則に、個々人を従わせたのである」(Ibid. 邦訳72ページ、傍点は引用者)。問題は、上に引用したような個人的な利潤動機を否定し、市場の存在をも否定するボラニーの主張が果たして本当なのか否かである。近年、こうしたボラニーの見解を真っ向から否定するいくつかの主張が登場してきたことは注目に値する。⁽²¹⁾以下では、ボラニーの主張を否定する、ないしは疑問を呈する有力な見解を取り上げよう。

最初にボラニーの見解を批判したのは、おそらくヴィーンホフ (K. R. Veenhof) であったと思われる。彼はボラニーの「市場」の概念について2つの問題を指摘する。「第1は、本当に“市場空間”——必ずしも現実の四角い広場というのではなく、おそらく町の門近く、あるいは店が並んだ路地の相互に密接に関連する集まりといったオープンスペース——(そこでは交換取引、すなわち地元の食料および消費財の交換取引が営まれる)が存在したかどうかということである。第2は、もっと重要な疑問であり、実際に都市間および陸路での取引において機能する“自由な”市場が存在し、諸価格が供給と需要によって形成され、利潤を求めて取引する商人が存在したか否

(21) ダルトン (George Dalton) は、古代メソポタミアを対象にして以下のように指摘し、原始的経済における市場の存在を否定する。「原始的経済では、市場の交換取引はまったく存在しないか、あるいは生計にとってささいな重要性にすぎないのである。非市場経済では、たいして大きくない労働や土地の量が雇用ないし販売された。すなわち資源市場は存在しないか、あるいは生産物の売買のための市場立地は存在しなかったのである。ただ周辺部にのみ市場をもった原始経済では、少量の生産物が対面的な (face-to-face) 取引によって市場において販売されたものの、ほとんどの人々はそうした販売での生計に依存しなかったし、市場の価格は食料生産者の生産の決定に影響しなかった。われわれはそのような存続経済 (subsistence economies) を定義する他の2つの特徴を包括しよう。すなわち近代的な機械技術および応用科学が生産過程において用いられていない、そして伝統的な社会組織と文化的慣行が力を持っていたのである」(Dalton [1967] pp. 156-157)。このように、古代メソポタミアに代表される原始的経済では、市場での交換取引は存在しないか、存在しても他の手段によって与えられる基礎的な生存のための補填に過ぎなかったというのである。

原始貨幣と貨幣の起源

かということである。市場広場 (market place) の存在は自動的にそのような“自由”市場取引が行われたということの意味しない——ボラニーはそれらが本質的に相互に関連していることを強調するけれども——。もし“自由”市場ではなくて、“協定取引” (treaty-trade) システムが普及していたなら、第1のタイプの何らかの現地市場取引が存在したかもしれない。ボラニーは市場の不存在という彼の確信を主張し、メソポタミア諸都市における発掘された市場の不存在を指摘し、かくてこれまで“市場および市場システムの機能”の不存在を指摘してきたのである」(Veenhof [1972] 邦訳351-352ページ)。

ノース (Douglass C. North) は、ボラニーの見解についてこう述べている。「市場型社会が破滅に向かうことを最初に力説したのは、『大転換』の著者カール・ボラニーである。ボラニーは19世紀の欧米に支配的となった市場型社会は、土地・労働および(国際金本位制を通じた)貨幣の商品化が社会的文化的構造を崩壊させたために、本質的に不安定であると主張した。ボラニーの華麗な文章を読めば、どのような論調で市場経済を批判しているか分かるだろう」(North [1981] 邦訳239-240ページ)。そしてボラニーに対する次のような批判を加えている。「ボラニーによると、現代の危機の根底にある自動制御市場 (self-regulation market) は、非人格的な労働市場、非人格的な土地市場、そして金本位制を基盤にしていた。この3つははすでに消滅したか、あるいはボラニーが描いた19世紀当時の状況から構造が大きく変化している。しかしその結果は、そうした変化についてのボラニーの慎重ながら楽観的な見解とほとんど似ていない。労働者や農民、企業グループの闘争から生まれた多元的な国家支配は、従来の所有権構造の崩壊をもたらし、それに代わって、第2次経済革命の潜在的な効率性を犠牲にして、政治の場で所得と富を再分配しようとする闘争を生み出した」(Ibid. 邦訳246ページ)。このノーベル経済学賞受賞者は、ボラニーが労働市場や土地市場などの構造変化を的確

に把握できなかつたと批判するのである。

以上のヴィーンホフやノースのポラニー批判に比べ、シルバー (Morris Silver) の批判はより周到でポイントを突いているように思われる。シルバーは次のように述べている。「彼 [ポラニー] の利用できる証拠のある事実に基づく主張に向かい合うことによって、古代世界とりわけ近東 (Near East) は市場活動を知らなかつたというポラニーの見解に挑戦するものである。論争の根本原則は、市場の存在の直接の否定をそれらに関するさらなる疑問を投げかける補助的な議論と結び付ける、ポラニーの2方面戦略を反映している」(Silber [1995] p.95)。シルバーはこう述べて「市場の存在」と題する第5章において、ポラニーの代表的著作 *The Livelihood of Man* (『人間の経済』) における14のポラニーの「主張」を取り上げ、それぞれに対する反論を展開する。

例えば、「市場は、紀元前7世紀初期のギリシャでは知られていなかった。実際、この1000年以上も前には、近東諸国 (アッシリアの交易の中心カッパドキア (Cappadocia) を含む) は価格形成市場なしに十分な国際貿易を行っていた」というポラニーの主張 (主張1) に対してこう反論する。「前もって諸価格の特定——交換の時点でのスポット取引においてそれらを決定するのはと反対に——供給と需要の諸力が働かない、あるいは不適切であることを意味しない。個人的な長期契約での諸価格の特定は、不確実性と機会主義および諸市場での不一致を制限するのに役立つ」(*Ibid.*, p.97)。そして次のように付け加える。「アッシリアの貿易拠点での価格形成に関する証拠は、通常の市場諸力の作用と十分に整合的である。貿易拠点からの何千という商取引文書は、主な輸入財 (錫と織物) の需要と供給の変化や季節性、緊急事態の効果に言及し、それらは価格の変化を記録している。短期間の錫の価格の20パーセント以上の変化を含む価格変動は、ポラニーの立場とは矛盾する」(*Ibid.*, p.98, 傍点は引用者)。

原始貨幣と貨幣の起源

また、食料や他の必需品の市場が政府の統制によって決定されるというポラニーの主張（主張2）に対してシルバーは異を唱える。「証拠によれば、一般的ルールとして近東の政府は穀物価格を統制することを示唆していない。穀物市場および市場諸力の作用についての証拠が存在する。第3千年紀の文書は大麦価格の急激な変動を明らかにしている」（*Ibid.*, p. 103）。こうも述べている。「メソポタミアおよびおそらくエジプトでの穀物価格の季節的な変動を示す証拠がある。もちろん、季節的なパターンは、正の保管費用による収穫後の期間の供給曲線の左方シフトの結果である」（*Ibid.*, p. 105）。

さらにポラニーは土地市場および労働市場の存在を否定する（主張6）。これに対してシルバーはこう反論する。まず土地市場について、「事実はまったく異なっている。……文書での土地の賃貸借は主に第4世紀に利用可能となった。他方、ウル第3王朝（Ur III Dynasty, 紀元前2112-2004年）および中期バビロニア期（紀元前1595-1155年）を例外とすれば、個人的に所有される（宮殿や神殿を除く）牧草地の販売と賃貸借は、第3千年紀の中葉から紀元前6世紀までのメソポタミアの歴史の全期間に共通していた。さらに第3千年紀に遡る北部と南部のバビロニアの最も古代の利用可能な記録は、個人間の牧草地販売の十分で決定的な証拠を提供する」（*Ibid.*, p. 122）。

シルバーは労働市場として特に重要であった奴隷市場（slave market）を問題にする。彼はこう指摘する。「古代近東世界が、奴隷労働に対する活発で法的に認可された市場であることを知っていたのは少しも疑問がない。このことは、メソポタミアの第3千年紀の半ば以降、そしてエジプトの〔紀元前〕17世紀以降、記録に残っている」（*Ibid.*, p. 132）。以上のように、シルバーは古代バビロニアにおいて奴隷市場や賃金労働者から成る自由労働市場が広く存在していたというのである。ともあれ、筆者の知る限り、以上の古代メソポタミアにおける市場の存在を肯定するシルバーの見解が、市場の存在を否定するポラニーに対する最も体系的で包括的な批判であるように思われる。

次のようなパウエル (Marvin A. Powell) のポラニー批判も痛烈である。パウエルはこう指摘する。「歴史的理論についての真偽の判定 (acid test) は、それがすべての証拠を説明するかどうかである。不幸にもポラニーの理論がつかずいた特定の見解は、古代アッシリア交易からの証拠である。そのポラニーのモデルは、古代アッシリアには妥当しないことは、30年ほど前にヴィーンホフによって十分に論証された」(Powell [1999] p. 8)。また、パウエルはポラニーの主張の問題点を以下のように要約する。「ポラニーはメソポタミアの市場について次のように仮定し主張した。①ヘロドトスは紀元前5世紀の半ばにバビロンを訪問し、ペルシア人は市場を持たないと報告した。②バビロニアの文書は、古代バビロニアとヘロドトスの時代の間には何ら本質的な経済的变化を示していない。③市場は、もしそれらがハンムラビの時代(古代バビロニア)に存在したとしても、ヘロドトスの時代にも依然として存在していたであろう。④考古学は、パレスチナでは、市場であると解釈されうる合理的な都市のオープンスペースを明らかにしなかった。⑤バビロニアについての楔形文字の記述は、市場についてうまく説明できない。⑥市場についてのどんな言葉も、バビロニアの楔形文字は原典には存在しない。⑦オッペンハイム (A. L. Oppenheim) によれば、考古学的証拠は、近東全体の至る所の都市の存在を裏づけていない⁽²²⁾。パウエルは以上のポラニーの7つの主張を検討し、そのほとんどすべてが誤解や誤った情報に基づいて間違っているとの結論を導くのである。そしてパウエルはこうした検討の結果、「要約すれば、経済的メカニズムの意味での市場広場および市場の両方がバビロニアに存在し、それらがアナトリア (小アジアの別称——引用者) における同時代の市場のような供給と需要によって形作られていたと信じる十分な理由が存在する」(*Ibid.*, p. 11) と断定するのである。

(22) オッペンハイムについては、Oppenheim [1977] を参照されたい。

以上のボラニーの「市場不在説」（ないし「市場存在の虚構性」）とほぼ同様の見解に立つのは、レンガー（Johannes Renger）である。彼はボラニーに対して次のようなコメントを付している。「ボラニーにとっての“市場”とは、一定の財およびサービスに対する供給、需要および価格の間の相互作用を決定する自己調整的なメカニズムである」（Renger [1984] p. 41）。「ボラニーは、古代バビロニアの経済を市場および市場立地が経済活動における支配的な要素ではなく、限界的なあるいは第2次的な役割を果たしたに過ぎないシステムであると把握したように思われる」（*Ibid.*, p. 61）。

レンガーは、古代バビロニアを中心とするさまざまな市場の存在に関する考え方を紹介しながら、自らの見解をこう要約する。「古代メソポタミア経済を決定する経済的要因として、市場は全体として存在しなかったというのと同様に明らかとなった。古代メソポタミアの都市の中に論証できる物理的特徴としての市場が存在したという証拠は以前より疑わしいけれども、私は、市場の機能を持っていたいくつかの所在地や機会が存在したということ指摘した。われわれはそれらを市場代替（market substitute）と呼べるかもしれない」（*Ibid.*, p. 113, 傍点は引用者）。「もう一つの古代バビロニア期の市場の状況についての一面には、特定の財の利用可能性に制限ないし限界があるように思われる。こうした状況の結果は、古代バビロニア文書の集大成に明らかである。すなわち、人々は彼ら自身の町や地域で手に入れることができないものを確保するために、どこか他のところに住んでいる人に手紙を出すのである」（*Ibid.*）。最終的にレンガーは次のように要約する。「かくて、上に記述したような市場代替物とそのサブ・システムとしての限られた形態は、本質的にそれぞれの社会的水準に関する再分配と互酬性の原則によって支配される経済過程を補完するアクセサリー以上のものでは決してなかった。もう一つの要素——それほど十分には明確ではないけれども——は、古代メソポタミアにおける商品交換の場所としての市場の必要性である。単なる生

存のための農業経営に基づく社会経済的システム（大部分の大衆に妥当する）および自己充足的な農業家計（社会の上層部分に妥当する）は事実上、自己調整的市場ないし市場システムの余地がないのである」（*Ibid.*, p. 114, 傍点は引用者）。ポラニーの主張を補完し、明確にするうえで、以上のレンガールの指摘は興味深い。しかし、ポラニーやレンガールの主張が果たして的確を得ているか否かは別の問題である。

ゴッデリス（Anna Goddeeris）は次のように指摘する。「レンガールは、“前近代的経済は、いわゆる“市場経済”とはまったく異なったメカニズムに従って機能した”という、市場の存在に反対する主な議論は否定できないと主張する。しかしながら、非産業社会には多くの市場があるし、“市場”を近代の“西洋的”用語で定義するのは間違いである」（Goddeeris [2002] p. 383）という。彼女はこう述べている。「古代アッシリアの資料や市場に関する珍しい参考文献のみならず、われわれの文書の集大成に見出される古代バビロニアの貸し付けや購入品は、市場メカニズムがメソポタミアの人々の経済生活……に重要な役割を果たしたことを示している」（*Ibid.*）。

ゴッデリス女史は5つのタイプの商品において市場原理が働いていたか否かを具体的に検討する。5つの商品とは、①不動産、②農業生産物、③地方の非農業生産物、④輸入品、⑤労働力である。これらについての調査結果を簡単に述べると次のとおりである。①について、不動産の価格は供給と需要の原則に依存する場合もあるが、需給原則以外の社会的要因（例えば、住居の立地や家族関係など）にも左右される。それゆえ、需給原理は必ずしも妥当しない。②と③の商品については、原則として自由に売ったり買ったりできるので、これらの価値は季節的変動を受けやすい。大麦の価格は収穫直後には収穫前よりも安いという事実は、明らかに需要と供給の市場原理を反映している。④については、例えば、銀、ブロンズ、鉛、錫などの金属の価格は、原産地からの距離に依存して価格も上昇する。このように、これらの商

原始貨幣と貨幣の起源

品の価格は完全に需要と供給のメカニズムに左右される。⑤の労働力の価値（賃金）の変動は最も決定するのが難しい。古代バビロニア期においても、ある季節における経済的状況はより多くの労働者を必要とするけれども、労働者の賃金はこの需要の増大に依存しなかった (*Ibid.*, pp. 384-385)。

以上のような各種調査の結果を踏まえて、ゴッデリスは次のように述べている。「われわれは、市場原理は、初期バビロニア社会の多くの局面において一定の役割を果たしたと結論しなければならない。それら [市場原理] は、古代バビロニアの楔形文字の記録に記されたあらゆる社会の階層、すなわち宮殿、神殿、および都会人の取引にかかわっている。だが、不動産と労働力の価格は、われわれの産業化され、国際化された経済に依存するのと同じようには、供給と需要のメカニズムに依存しなかった」 (*Ibid.* p. 385)。さらにゴッデリスはこう付言する。「私は、“市場メカニズム”を一定の財・サービスに対する供給、需要および価格の間の相互作用を決定するメカニズムと定義する」 (*Ibid.* p. 384)。「これらの市場メカニズムは初期バビロニア経済に存在したのだろうか。ここに提出された証拠に基づいて、われわれはある程度そうであると述べることができる」 (*Ibid.* 傍点は引用者)。古代バビロニアの楔形文字で記述された各種の資料に基づくゴッデリスの分析は周到で客観的であり、その主張には大きな説得力があるように思われる。ただしポラニーやレンガーと、ヴィーンホフ、ノース、シルバー、パウエル、ゴッデリスなどとの溝はまだ埋まっていない。古代バビロニアにおいて“市場”の実態はどのようなものであり、それがどれほどの影響力を持っていたのか。その“市場”で活躍した商人たちは、単なる物資の分配・交換に関与する存在だったのか、それとも利潤動機に基づく積極的な仲買人だったのか。今後の研究にとって、そのような視点も必要であると考えられる。

これまで述べてきたように、古代バビロニアを中心とする社会には、市場の存在を否定するポラニーの見解が支配的であったものの、そうした市場不

在説を否定する有力な見解が次第に優勢となりつつあるというのが、現時点での概観であると言えよう。⁽²³⁾近年、ヴィーンホフ、ノース、シルバー、パウエル、ゴッデリスなど多くの論者が、ポラニーの古代バビロニアにおける市場不在説に疑念を呈し、それを否定するようになったことは疑いを入れない。その背景には、近年、数多くの遺跡調査、粘土板資料の解読やシュメール(Sumer)語、アッカド(Akkad)語の語彙の収集などによる研究の進展があり、そのことがポラニーの主張する「互酬・再分配・交換」という図式を変貌させ、彼の市場不在説を疑問視するようになった有力な原因として指摘できるのである。

以上、ポラニーの市場および市場制度に対するさまざまな観点からの評価について検討し分析を加えた。特徴的であるのは、ここで取り上げた古代バビロニア研究者はレンガーを除いてすべてポラニーの見解に否定的であることである。こうした背景には、ポラニーが主たる対象とした古代メソポタミア社会についての人類学や考古学、民族学、社会学などの研究の進展があったことは確かであろう。古代メソポタミアを対象とする度重なる遺跡調査、発掘した粘土板資料などの解読技術の進展、さらにはシュメール語やアッカド語の語彙の収集と蓄積などの成果が積み重なって、ポラニーに牽引された古代メソポタミア観を大きく変容させるようになったのではあるまいか。ポラニーの互酬・再分配・交換を基盤とする古代メソポタミア社会という構図

(23) 上に説明したポラニーの主張には、すでに述べたように多くの反論がある。ポストゲートによれば、古代バビロニアにおける財の交換は、①互恵的方法(reciprocal mode)、②再分配方法(redistribution mode)、③商業的方法(commercial mode)の3つに大別される。初期バビロニア社会では、これら3つの方法は相互に排他的ではなく、共存しているという特徴がある(Postgate [1992] Chap. 10)。だが、すでに本稿で引用したように、レンガーはポラニーを支持して、「市場は[厳密には、市場代替物とそのサブ・システム——引用者]、……再分配と互酬性の原則によって支配される経済過程を補完するアクセサリー以上のものでは決してなかった」というのである。

原始貨幣と貨幣の起源

は今やすっかり塗り替えられようとしていると言っても過言ではあるまい。それとともに、ポラニーの市場不存在仮説（あるいは市場の虚構仮説）も見直しを迫られているのではなからうか。もっと言えば、ポラニーの経済人類学の中核をなす「貨幣観」と「市場観」の妥当性自体が疑問視されているのである。

おわりに

原始貨幣とは何か、それを真正面から定義することは思いのほかむずかしい。さまざまな考え方があがるが、ここではポラニーにならって「原始貨幣は特定目的貨幣である」と見なすことにする。「特定目的貨幣」（あるいは「限定目的貨幣」）とは、簡単に言えば、貨幣の対象となるモノがそれぞれ異なる貨幣用途を持つという意味である。

本稿では、こうした貨幣の定義を踏まえ、福田徳三、モース、マリノフスキー、ポラニーのそれぞれの貨幣起源説、あるいは貨幣と市場の関係などについて不十分ながら考察した。このうち、福田徳三の貨幣起源説はモース、マリノフスキー、ポラニーに比べても年代的にかなり古いにもかかわらず、これまでまったく注目されず、完全に無視された（あるいは忘れ去られた）存在である。だが、貨幣の起源を宗教に求める彼の宗教起源説は、きわめて独創的であり、現在においても非常に説得的であるように思われる。

モースの貨幣起源説は、代表的著作『贈与論』を中心に、贈与という非経済的取引が交換取引を生み出す端緒となったと主張し、また原始貨幣を含む貨幣の発展段階について自説を展開する。モースによれば、贈与には受け取るだけでなく返礼の義務があり、こうした義務的贈与システムが交換の原初的形態なのである。彼は、ポトラッチ、クラなどの交換システムの分析によって、宗教、道徳、法、経済などの諸領域に還元できない「全体的給付体系」と呼ぶ独創的な概念を提起し、マリノフスキーやポラニーにも大きな影響を

与えたようである。

一方、マリノフスキーはトロブリアンド諸島におけるフィールドワークを通じて、クラ制度という贈与・交換システムを徹底的に研究する。マリノフスキーによれば、クラの制度では、ソウラヴァ（首飾り）とムワリ（腕輪）と呼ばれる2種類の品物の交換取引は、すべて一定の伝統的な規則と慣習によって決められ、クラの行事も呪術儀礼と公式な儀礼を伴うとされている。すなわち、呪術とクラとは不即不離の関係にあり、現地の住民にとって呪術の占める役割が圧倒的に大きい。マリノフスキーのトロブリアンド諸島における体験は、民族学者・人類学者としての問題意識の明確化、フィールドワークという新たな研究手法の確立によって、数多くの独創的な学問的成果を生み出す大きな原動力となった。

ポラニーは経済人類学という新分野を開拓した第一人者として知られている。その上、文化人類学や歴史学などにも精通し、その該博な知識を活用して幅広い分野にわたって多くの業績を残している。なかでも注目されるのは、貨幣および市場に関する業績である。彼は、原始貨幣の定義は貨幣用途、すなわち交換手段、支払い手段、価値尺度、価値貯蔵に依存し、そのいずれかに該当するものが貨幣と定義される。これが、いわゆる「特定目的貨幣」（ないし「限定目的貨幣」）である。そして、これら4つの貨幣の機能を備えているものが「全目的貨幣」（ないし「多目的貨幣」）と定義される。ポラニーによれば、「特定目的貨幣」から「全目的貨幣」へと発展したのが貨幣の歴史である。ポラニーはまた、貨幣と密接に結びつく市場（ないし市場制度）について古代社会、とりわけ古代バビロニア社会に着目する。ポラニーは、古代バビロニア社会は互酬・再分配・交換を基盤とする社会であり、商人の利潤動機に基づく競争的社会は存在しなかったというユニークな見解を提示する。これが、ポラニーの市場不在仮説あるいは市場の虚構性仮説である。

以上のモース、マリノフスキー、ポラニーの見解は、いずれも従来の伝統

原始貨幣と貨幣の起源

的な見解を覆す興味深い視点と内容を持つてはいるものの、いくつかの問題を抱えていることは確かであるように思われる。例えば、モースやマリノフスキーが対象としたマウイ族やトロブリアン諸島の風俗・習慣や特殊な貨幣が、一般的な普遍性を持っているのかどうかという素朴な疑問である。モースは、メラネシアやポリネシア、あるいはアメリカ原住民などを対象とする豊富な資料を駆使して、「贈与」を基軸とする人類学的・民族学的な比較研究を行う。マリノフスキーは、ニューギニアの東部沖にあるサンゴ礁からなる島嶼群のトロブリアン諸島を主たるフィールドワークの拠点とする。

「所変れば品変る」という言葉がある。土地が違えば風俗・習慣も異なるという意味である。モースやマリノフスキーが体験した世界が異なれば、彼らの記述内容が異なるのは当たり前である。杞憂であれば幸いであるが、彼らが対象としたごく狭い世界を一般的・普遍的に取り扱うことには大きな問題があるように思われてならない。筆者の正直な感想である。

ポラニーの主張する「特定目的貨幣」あるいは「限定目的貨幣」という着想は興味深いけれども、しかし本来の意味でそうした貨幣は貨幣と言えないのではなかろうか。福田徳三が力説するように、貨幣とは交換手段、支払い手段、価値尺度および価値貯蔵という4つの機能をすべて兼ね備えているものでなければならない。換言すれば、貨幣とは「全目的貨幣」であり、「特定目的貨幣」（あるいは「限定目的貨幣」）ということ自体、一種の名辞矛盾なのである。ポラニーの市場不在仮説あるいは市場の虚構性仮説にしても、古代バビロニアを対象とする遺跡調査や発掘した粘土板資料の解読技術の進歩などの成果を背景に、彼の「貨幣観」や「市場観」の妥当性に疑問を呈する動きも強まっている。時代の変化につれて、「貨幣観」や「市場観」も着実に変化しつつある。それが筆者のごく平凡な感想でもある。

参 考 文 献

(以下に引用した文献については、必ずしも翻訳には従っていない。また、原文献が当用漢字でない場合や旧仮名遣いで表記されている場合は、それを当用漢字や現代仮名遣いに改めた場合がある。なお著書の出版年で () 内にあるのは、初版の出版年を表している)

- Armstrong, W. E. [1978 (1928)] *Rossel Island: An Ethnological Study*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Backhaus, J. G. [2000] *Karl Bücher: Theory—History—Anthropology—Non Market Economies*, ed. by Backhaus, J. G.)
- Benveniste, Émile. [1969] *Le Vocabulaire des Institutions Indo-Europ éennes, I, Économie, Parenté, Société*, eds. de Minute, Paris (前田耕作監修『インド É = ヨーロッパ諸制度語彙集——経済・親族・社会』言叢社, 1986年)
- Dalton, George [1967] “Tribal and Peasant Economies” *Reading in Economic Anthropology*, Austin/Texas-London, pp. 156-p. 157.
- Einzig, Paul [1966 (1949)], *Primitive Money—In its Ethnological, Historical and Economic Aspects*, second edition, Oxford, Pergamon Press (first edition, 1949).
- Frazer, J. G. [1925 (1890)] *The Golden Bough, A Study in Magic and Religion*, Macmillan (永橋卓介訳『金枝篇』(一), 岩波書店, 1974).
- Friedman, M. [1992] *Money Mischief: episodes in monetary history*, San Diego, California, Harcourt Brace Jovanovich. (斎藤精一郎訳『貨幣の悪戯』三田出版会, 1993年)
- Goodris, Anne [2002] *Economic and Society in Northern Babylonia in the Early Old Babylonian Period (ca.2000—1800BC)*, Peeters Publishers & Department of Oriental Studies, Leuven/Louvain (Belgium).
- Grierson, Philip [1977] *The Origins of Money*, London, The Athlone Press.
- Hawtrey, R. G. [1919], *Currency and Credit*, first edition, Longmans, Green and Co., London.—Karimzadi の引用—
- Hicks, J. R [1967], *Critical Essays in Monetary Theory*, Oxford: Clarendon Press (江沢 太一・鬼木 甫『貨幣理論』東洋経済新報社, 1972年)
- Hicks, J. R. [1969] *A Theory of Economic History* Oxford: University Press (新保博・渡辺文夫訳『経済史の理論』講談社学術文庫, 1995)
- Hoit, E. E. [1926], *Primitive Trade, Its Psychology and Economics*, London, Reprints of Economic Classics, A. M. Kelly, New York, 1968 (中村 勝訳『交換のアンソロポロジ——その原始心性と経済の統合——』見洋書房, 1992).
- Hudson, Michael [2000] “Karl Bücher’s Role in the Evolution of Economic Anthropolog,” (in *Karl Bücher: Theory-History-Anthropology-Non-Market Economcs*, edited by Jürgen. Backhaus, Metropolis-Verlag, Marburg).
- Leach, J. W. and Leach, Edmund [1983] *The Kula: New Perspectives on Massim Exchange*,

原始貨幣と貨幣の起源

- Cambridge University Press, Cambridge.
- Malinowski, B [1922], *Argonauts of the Western Pacific*, London, Routledge and Kegan Paul (増田義郎訳『西太平洋の遠洋航海者』講談社学術文庫, 2010).
- Malinowski, A. Valleta Malinowski [1967] *A Diary in the Strict Sense of the Term*, by Bronislaw Malinowski, John Hawkins & Associates, Inco (谷口佳子訳『マリノフスキー日記』平凡社, 1987年)
- Mauss, Marcel [1925] *Essais sur le: Forme raison de l'échange dans les sociétés archaïques, L'Année Sociologiques, nouvelle série, I* (吉田禎吾・江川純一訳『贈与論』ちくま学芸文庫, 2009年).
- Mauss, Marcel [1968] *Sociologie et Anthropologie*, Presses Universitaires de France (有地亨・伊藤昌司・山口俊夫訳『社会学と人類学1』, 弘文堂, 1973年)
- Morgan, L. H. [1877] *Ancient Society or Reserches in the Lines of Human Progress from Savagery through Barbarism to Civilization*, Charles H. Kerr.
- North, D. C. [1981] *Structure and Change in Economic History*, New York, W. W. Norton & Company, Inc (中島正人訳『文明史の経済学』春秋社1989, 大野一訳『経済史の構造と変化』日経BP社, 2013年) ——訳後者をカットの予定.
- Oppenheim, A. L. [1977 (1964)] *Ancient Mesopotamia: Portrait of a Dead Civilization*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Polanyi, Karl [1957a] *The Great Transformation—The Political and Economic Origins of Our Time* ——, Boston, Beacon Press (吉沢英成他訳『大転換』 ——市場社会の形成と崩壊 ——) 東洋経済新報社, 1975年)。
- Polanyi, Karl [1957b] “Aristotle Discovers the Economy”, in Dalton, G. (ed.), *Primitive, Archaic, and Modern Economies*, Boston, Beacon Press (玉野井芳郎・平野健一郎編訳『経済の文明史』日本経済新聞社, 1975年所収)。
- Polanyi, Karl [1957c] “The Semantics of Money-Uses” (「貨幣使用の意味論」) 玉野井芳郎・平野健一郎編訳『経済の文明史』筑摩書房, 1975)。
- Polanyi, Karl [1977] *The Livelihood of Man*, edited by Harry W. Pearson, New York, Academic Press (玉野井芳郎・栗本慎一郎訳『人間の経済 I ——市場社会の虚構性 ——』岩波書店, 1998年)。
- Postgate, J. N. [1992] *Early Mesopotamia: Society and economy at the dawn of history*, London and New York, Routledge.
- Powell, M. A. [1999 (1997)] “Wir müssen unsere Nische nutzen; Monies, Motives, and Methods in Babylonian Economies,” in J. G. Dercksen, edited *Trade and Finance in Ancient Mesopotamia*, MOS Studies I, Nederlands Historisch-Archaeologisch instituut; 5-24.
- Quiggin, A. H. [1949 (1874)], *A Survey of Primitive Money*, New York, AMS Press (reprint, Methuen, London, 1949).
- Renger, Johannes [1984] “Patterns of Non-Institutional Trade and Non-Commercial

- Exchange in Ancient Mesopotamia at the Beginning of the Second Millennium,” (in *Circulation of Goods in non-Palatial Context in the Ancient Near East* edited by Alfonso Archi, Roma, Edizioni dell’Ateneo).
- Schumpeter, Joseph A. [1954], *History of Economic Analysis*, New York, Oxford University Press (東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史』(下) 2006年)。
- Silver, Morris [1995] *Economic Structures of Antiquity*, Westport, Greenwood Press,
- Veenhof, K. R. [1972] *Aspects of Old Assyrian Trade and Its Terminology*, Leiden, Netherlands, E. J. Brill,
- 内田銀蔵 [1924] 『日本経済史の研究』 同文館。
- 染木 煦 [1945] 『ミクロネシアの風土と民具』 彰考書院。
- 友杉 孝 [1994] 「貨幣」『文化人類学事典』(縮刷版) 弘文堂。
- 日本銀行調査局編 [1972] 『図録日本の貨幣 1 ——原始・古代・中世』 東洋経済新報社。
- 福田徳三 [1889] 「祓除ト貨幣ノ関係ニ就テノ愚考」『国家学会雑誌』 89-100ページ。
- 福田徳三 [1925] 『流通経済講話』 大鑑閣。
- 古川 顕 [2012] 『R. G. ホートレーの経済学』 ナカニシヤ出版。
- マルセル・モース／アンリ・ユベール [1908 (1899)] 『供儀』 (小関藤一郎訳, 法政大学出版局, 1983)。
- 本居宣長 [1974] 『本居宣長全集』 第九卷 (「古事記伝六之卷」) 筑摩書房。
- 横山由清 [1879] 「日本上古売買起源及貨幣度量権衡考」『学芸志林』 第4卷 (明治42年4月) 209-234ページ。